Our place

朝比奈　龍希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏｕｒ　ｐｌａｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ７５３１Ｓ

【作者名】
朝比奈　龍希

【あらすじ】
あたしは、家族友人に恵まれなかった。友人の出した自殺予告メールを受け取り、車で友人宅に向かう最中ダンプにオカマを掘られ、車は空を舞ってあたしは死んだ。気付くと不思議な空間にいて美少年天使が待っていて、ほぼ強制的に転生させられた。転生先は宇宙船や魔法が平気で存在する世界。そこであたしはナツキ・ルウィン・アマハと言う名の娘になって、父は宇宙考古学者と、母は魔法界の女帝と謳われ、兄は美形さんでシスコン街道まっしぐらになりつつある。そんな美形家族の一員になった。ラグナリア星で女王様即位

５年記念の夜会へ行った際、私は拉致された上殺されそうになる。
そこに現れたのは、一人の少年と女王陛下だった。
その事件の１０年後、私はジュラーレ魔法学院へ入学する前日、母親達の目論みにより、第二皇位継承者のカグラとの婚約発表に驚きながらも入学されられる。その学院には婚約者もいる状況で…魔法で肉体を中性体とし、名前も一部変えて…。

親達の思惑通りに恋に落ちるか？　はたまた、他の男性と恋に落ちるか？　前途多難な学院生活の開幕です！

こんなの求めてないから！（前書き）

ＳＦモノが書きたい！でも魔法も使いたい！と言うかなり無茶な構想の中で作っております。
目指すＳＦの個人的王道はスタトレヴォイジャーです。ファンタジーに関しましては色々有り過ぎて何でもござれな感じです。
プラス仕事上の観念も取り入れて物語を作っております。
のっけはかなりダークです。ごめんなさい。（＿＿）（＿＿）（－ω－；）（＿＿）（－ω－；）ペコペコ

こんなの求めてないから！

「……」

これで何度目だろうか？
あたしは携帯のディスプレイに出された、トモダチのアイツからのメールに絶句した。

――――もう、疲れた。これから死ぬね。

「またぁ？！　コレなの？」

一度目は、電話で告げられて。
しかも自殺の仕方が杜撰過ぎて、笑いを通り越して呆れた。

真冬で洗面器にお湯を張って、手首を切ってそこに浸けたと言う・・・・・まぬけっぷり。真冬ダヨ？お湯なんか直ぐに冷水になってしまうのが解らないなんてありえねぇヨ！

次にかましたのが、切った手首をストーブの前に置いて・・・・・血が固まるじゃん！なに考えてるのよ？このヒトは！って正直トモダチやってるのが嫌になった。

実際、大した流血量でもなくて、自分が間違って親指にカッターナイフをぶっ刺した時なんか、刺した瞬間、指を口の中に咥えて、洗面台に走ったよ！あの時はビビッた。洗面台が血の海だったよ！その上、結構な流血量だったので眩暈がした位だし、３分は血が止まるまで放置するしか無かったらから大変だったけ。
そんくらい血を流して見やがれ！大変なんだぞ！痛いんだぞ！

その上、アイツは親兄弟友達に甘えまくり。
羨ましいを通り越して腹立たしい。言っちゃあ悪いが、あたしの家はマトモじゃない。

あたしと父親の殴り合いのケンカは日常的にあり、母親はどっかおかしい。あたしの一つ下の子を堕胎して水子じゃないとのたまう。ばーちゃん、じーちゃん、育て方間違え過ぎだよ！と泣き付きたくても、小学校の時に死んでてどうにもならない。

死ぬたくなったのなんか、星の数ほどあるんじゃないかって位だ。親を惨殺してしまいたくなったのだってある。理不尽な暴力や言い分には、何度となく嫌な気にさせられた。

でも、あたしはそれを実行しなかった。

あたしの周りには命の儚さを見せ付けられる現実があったから。小学生で退院したら遊ぼうって言っていた男の子は、白血病で呆気なく死んだ。

3つ下の近所の女の子は、車に撥ねられて口から泡と血を流して即死した。

ばーちゃんは、心臓発作で突然死んだ。
流石にあの時はめちゃくちゃ悲しくて人のいない所で泣き叫んだ。
自分の命あげるから返してって。
誰よりもあたしに愛情をくれた人を助けたかったし、置いていかれたくなかった。

でも現実なんて非情でしかない。

生きたいのに生きられない人が沢山いるけれど、反対に命を粗末にする人が山ほどいる。

あたし、隠し事は好きじゃないから、自分の事を話していたのにも関わらず、アイツは命を軽んじる。
マジで悔しかった。

あたしの思いを踏みにじられまくっていて「気分転換に何時でも付き合うし、苦しい時は誰だってあるから、話まくって解決しよ」って言ったのに・・・・・こんなオチ。

あんまりだっ！！

「仕方ない、行くか」
溜め息一つ吐きつつ、あたしは車のキーとバックを持って家を出る。

あたしのエゴだって解っている。
何度駆けつけたって、アイツの心には響かないし、届かない。

でも、自分と関わりがある状態で死なれるのはたまらなく嫌だった。
きっと、自分と関わりが無くなってアイツが死を選んだとしても、あたしは気付かないでいるだろう。知らされなければ分からずに生きていられるから。

だって、そうなれば、自分の気持ちを掻き乱されなくてすむから。
平穏な毎日じゃないから、これ以上気持ちをざわつかせたいとは思わない。

せめてトモダチと一緒にいる時は、わいのわいのして日常の鬱積から離れていたいものなのにこんな状況嬉しくない。

気分転換にロックな曲を掛けて、トモダチの家へ向かう。
また大した手首の切り方じゃないのや、睡眠薬の飲み過ぎくらいだろう事は分かってる。

殺してやるとか、怨んでやるとか親に言ってるけど、あたしは大概にしてお人よしだなと思う。
それでも親に従ってしまうトコとか、あんなメールを送られてキレずに付き合ってしまう。

「はぁ……」

漏れる溜め息。
行ってどうなるものでもないけれど、気分が悪いし。

「あ……また、赤信号かぁ」

何度目かの赤信号で停車する。

キキキキキーーーー!!!
響く、高く耳障りな音。

「え？」

見なければ良かったと、思わず後悔した。
視線を上げて、あたしは見てしまった。
バックミラーに映る、迫って来るダンプカーの前面。

耳障りな音は、ダンプカーのブレーキ音。

「う、そ・・・・・・」

なんで、こんな!?
冗談でしょ？　マジなの!?

突っ込んでくるのが分かるのに、逃げられない。
逃げ場が無い。

バッカヤロー!!何考えてんだぁぁぁぁ!!!
思い付く限りの悪態を心の中で吐いた。

ドカン!!とも、ガシャーン!!ともつかない、破壊音と衝撃が伝わる。
粉々になったリアガラスがフロントガラスに跳ね返って、顔に当たる。

次の瞬間、身体がふわっと宙に浮いた。

車は空飛べるんだ〜!!
昔アニメで変形して飛んだよねとか、思うかヴォケー!!
確かに男の子のロマンだよね!

でも、こんな方法求めてないから!!!

手足がどこかにぶつかり、更に轟音が響いた。

そして、あたしの意識はブラックアウトした。

こんなの求めてないから！（後書き）

一部（？）実話を織り交ぜて作っております。
リアルに感じていただけたら嬉しいかも。

あの世とこの世の境ってどんなトコロ？

目が覚めたら、柔らかい草の上だった。

ぽかぽかとした春の日差しのような温かい日差し（？）が、身体を温めてくれる。

身体を起こし、頭上を見上げると真っ白だった。

空の色は無い。
純白の天井。

手に当たる感触は柔らかくさわさわしてる。
見ると、緑の草だった。
芝生みたいな感じだか、とげとげしていなくて葉っぱも少し大きめだった。

「ナニコレ？」

どーなってんの？

キョロキョロと周囲を見回すと、大きな樹が1本ぽつんと在った。
ＣＭとかで出てくるようなアレだ。この～き～なぁん～～の～き～♪とか歌っちゃうアレな感じのものだ。

「ここどこよ？」

あたしがぼそりと呟くと。

「あの世とこの世の境ダヨ」

目の前に顔が降って来た。

「ぎゃぁ！！」

思わず、びっくりして倒れ込む。

逆さの顔は、美少年だ。

何故かふよふよ浮いていて、逆さになっているだけだった。

くるんと、上下を引っ繰り返して美少年は緑に足を着いた。

「あはは～、ごめんごめん、びっくりさせちゃった？」

屈託なく笑う美少年には、邪気が無い。

服装は古代ギリシャ風の所謂、神話の神様が着ていた服に似ていた。

髪は紺碧、瞳はエメラルドグリーン、肌は小麦色、服はクリーム色の布地だった。

こんな美少年見たこと無い！！　間違いなく夢だな、夢。

拝んだ事も無い美少年をガン見して、眼福だな～ってほにゃ～っとしてると。

「お～～い？もしもーし、ぼくの言ってる事、理解してル？」

手を振り振りして、あたしを見詰めてる。

「え？あ、いや、見とれてました」

正直に答えると、美少年は笑ってくれる。

か、可愛い……。
思わず抱き締めたくなる可愛さだ！

「あはは～、ありがと～。キミみたいな子初めてダヨ」
「それは、褒めてるのかな？」
「うん、そーダヨ」

にこにこ笑って、あたしに手を差し出して起き上がる手伝いをしてくれる。

うわぁぁぁ～～。
いいの？　いいの？

ドキドキしながら、その手を取ると思うよりも強めの力で引っ張られる。
ちゃんと立って、目の前の美少年をたっぷり黙視してから正直な感想を述べる。

「夢としては、極上な夢だわ」

過酷な現実逃避をする為にも、アニメやアイドル、果ては俳優までいろいろハマった。
ＢＬだってオッケーな、根っからのミーハーなあたしとしては、この夢は極上だわ。

「だから～夢じゃないってバ」
「へ？」
「キミ、死んだんだヨ」
「え？」

「もっかい言うね、キミは死んじゃったノ」
「うそーん」
「嘘じゃないよ。見るも無残な感じでご臨終ダヨ」
「……」

「思い出してみなヨ？」
「ええと……確か、自殺未遂メール貰って……」
「そう、車でオトモダチのトコロへ向かってテ」
「信号で止まってたら、後ろからダンプが突っ込んできて……」
「そうそう、そんで死んじゃったノ」

美少年があまりにもサラッと告げるものだから、毒気を抜かれてしまい。
怒るとか、嘆くとか、喚くとか出来なかった。

生きるってどういうこと？

まさか、こんな感じで死ぬとは思わなかった。

恋愛して、彼氏作ってデートしてHだってしてみたいのに！

まさかのまさか、１８歳で昇天・・・・・・。

しかも、自殺未遂したトモダチが心配で向かう最中に交通事故に遭うとは、あまりにも馬鹿じゃねえのジブン？　と罵りたくもなる。

涙も出ないよ・・・・・・。

「ありゃ？泣かないの？キミ」

呆れるあたしを見て、美少年が不思議そうに覗き込んで来る。

ぎゃーーー！　顔が近い！　近すぎる！

心臓に悪い！

だが、嬉しい！　抱き付けたらもっと嬉しいかもしれん。

でもそんな積極的に出来てたら、今頃死んでないか。

女は結構薄情な生き物だもん。

恋愛か友情かって言ったら、恋愛取るでしょ？

それに、ラブラブな状態の子に態々鬱なメール送るヤツもいないだろうしね。

大体は自然に疎遠になっていくものなんだよね。

美少年をじっと見てから、あたしは一応訊いてみる。

「死んでるだから、泣いても意味ないんでしょ？　それとも生き返るわけ？」

「ムリ。生き返ったらゾンビだよ、ホラーダネ」
「ホラーって……」
「スプラッタな死に方だったからネ～」
「そんなに酷いんだ？」
「まぁまぁ酷いかな？見たイ？」
「見たくない！！」

にこやかに美少年が怖い事を言うので、即座に却下。
死に目なんて見たくない。
事故死した近所の子を目撃してるけど、あれはまだ綺麗な方だったのは分かる。
それでも、衝撃的だった。
今でも思い出せる位に。
だからこそ、自分の死体なんか見たくないし、その現場なんかみたら吐いちゃうよ、きっと。

「……ねぇ、君は天使なの？」

人間離れした超美少年で、自分の事を知っている。
あたしを黄泉へ導く者なのだろうか……。

「ま、そだね。人の概念で言えば、そう、死天使ってやつダネ」
「にしては、天使の羽とか、わっかとか無いね」
「頭の輪は、元々無いよ。羽はあるよ、見たイ？」
「え、見せてくれるの！？」
「うん、いいよ。減るもんじゃないからネ」

そう言うと美少年の背中に輝く翼が生える。
キラキラと光っててちょっと眩しい。
透き通る羽は、とても綺麗だ。

「すごい、きれー」
正直な感想を口にして拍手と賛辞を送ると、美少年天使は嬉しそうに笑った。

「アリガト。そう言って貰えると嬉しいネ」

死を司る天使なのに、こんなにも人懐こくていいのか？　とちょっと思う。
一瞬で羽が消える。

「ねぇ、ここ三途の川とか、レテの川とか、黄泉の入り口とかないし。アヌビス神が迎えに来たりしないの？」
「あはは～。キミ例外みたいなものだから、あっちの世界に渡る前にココに来たんだヨ」
「例外？」
「ソ。例外だ。人が肉体と言う器を持って生まれて来るのは何でだと思ウ？」
「死ぬためでしょ？」
「端的に言えばそうだね、他にも理由あるの分かル？」

エメラルドグリーンの瞳は、何かを探るようにあたしをじっと見詰める。
プレッシャーを掛けられている感じがする。
回答で地獄行きとかあるのかな？

「ん～～～？学ぶため？とか？」
「一言で言うならそうなるネ」
「キミが今まで感じたコトを言ってみてヨ」
「え？」

「死ぬまでの過去を振り返ってみてどう感じタ？」
「過去……ぇっと」

思い返してみる。
思い出すと腸が煮えくり返りそうになる思い出たち。
罵詈雑言でも吐けばいいのか？延々と言えちゃうよ、きっと。
きっとこの美少年天使が言えっていうのとは違うのは分かる。

「思い出したくないくらい嫌な過去多いんだけど……」
「そうだね、知ってるよ。でも、キミは自分の視点だけではない事を学んだよね？　理不尽な世界、不公平な世界、生があり死がある世界、欲望のままに生きたらどうなるか、世界のバランスを取らない人間達の末路について考え答えを出したよネ？」
「う、ん……」

もしも、何か大きな出来事が起きた時、人はずっと便利さばかりを選んでいれば、きっと自分の首を絞めると高校生の弁論大会でそんなコトを言った事もある。

理不尽な世界を作り出すのは人間。
不公平な世界を作り出すのも人間。
大切なものと便利なものは違うのに気付かない、気付こうとしないのも人間。

生命のバランスは絶妙に出来ていて、ある意味完璧な状態と言える。
それを平気に壊すのも人間が多い。

寿命や事故死は、定められた運命かもしれないと思う。
命を奪われるのも、一つの運命なのは分かる。

それが欲望のせいだったりすれば、人の心や世界に波紋を投げ掛ける。

なんの為に生きるのか？
何故死んでいくのか？
生きるもの全てに問い掛けている。

他にも疑問に思っていた。
動物愛護だと声高に主張するのに、動物の命を食らって生きるのは変だと。
捕鯨反対と言って船を沈めるのは海を汚した上、鯨だけじゃなく他の海洋生物全てを危険に晒すんじゃないのかと。
言ってる事はある意味正論かもしれない。
だけど、凄く矛盾している。

命は大事だ！
掛け替えの無いものだと言うが、人も動物も植物も全て命あるものに違いは無い。
それなのに、何故か線引きをするのは変な気がした。

これだって命じゃん、あれだって命じゃん、それだってやっぱり命でしょ？
なのに、差別するのはおかしいとずっとずっと思っていた。

――――理由は簡単、全ては人のエゴの物差しで計られている。

誰も死なない世界。誰も傷付かない世界。生命を奪って生きる事をしない世界。
それは、素晴らしい世界かもしれない。
でも、それって生きてるの？

天国みたいな世界ってコトは、完結した世界ってコトじゃないの？

「うん、そうだね。人の世界は矛盾で、生と死に満ち溢れている。けれど、完璧な世界でもある。苦しみ、悲しみがあるからこそ、喜びもある。嬉しいコトが、どうして嬉しいと感じられるか分かル？」

頷いて美少年天使が言った。

言葉を発しなくても理解してくれるのをあたしはすんなりと受け入れていた。

それが当たり前だと何となく理解していたから。

頭の中を覗かれても、嫌な気はしない。無条件に受け入れられる存在だと分かっているから。

「辛い事があってそれを体験するから？」

「そう。その通りだ。感情が発露するのは体験があり、また肉体と言う器があるからで、魂の状態では意味を為さない。魂はエネルギーの一つであり、等しく同じものであり、全ての魂はひとつなんダ」

「ひとつ？」

「イメージ的には。沢山の魂達は、星達の様に無数にあり、銀河や大きな宇宙のを形成しているようなものなんダ」

「……」

「難しいかな？でも、コレが一番分かりやすいと思うんだケド」

「沢山の魂達で、一つの宇宙と言うものになっているってこと？」

「そうそう。肉体を持った時点で、感情や学びや色々な物事に左右され、人は現世を学ぶ。どんな悪い結果だとしてもネ」

「悪い結果で死んだら、悲しくない？怨んだりしちゃうでしょ？」

「キミは怨んでいる？」

覗き込む様に美少年天使に問われる。

「よくわからない」

怨んだって、悲しんだって、憎んだって、何も変わらない。
むしろ自分が強くあろうと出来なかったのが悪いとも思う。
心が強ければ、夢だって掴めたかもしれない。
弱い心のままの自分を選択したのは、他でもないあたし自身だ。
だから、わからない。
何が正しいのかなんて、知らない。

「正解なんかないんだヨ」
「え？」
「怨む生き方を選択したのは自分自身。魂の時、ヒトはある程度未来予想図を描いて生まれてくる。本筋は一本だけど、多くの選択の中で選び、その結果を掴んでしまう。それだけなんだヨ」
「ある程度未来予想図ってどんなの？」
「例えば、生まれる所は何人家族で、試練は自分が病気になって生命の大切さを伝えたり、精一杯生きていくためだったりとかネ」

「あたしも、こういう風に死ぬって計画して生まれてきたって事なの？」
「一応はそうなんだけど、目的と相当変わっちゃってね～。だからキミは、今ココにいるワケ」
「どーゆーこと？」
「ぶっちゃけて言っちゃうと、本当は死ななくて良かったんだけど。あの状態で生き長らえるのは可愛そうだな～って思ってネ」
「そ、それは……もしや」
「うん、ぼくの一存で連れて来ちゃった！テヘ☆」

ニコっと笑って、爆弾宣言をする美少年天使をあたしは呆然と見詰めた。

死天使とあたし

「だってキミ面白いんだもン！」

にんまり笑う、美少年天使は褒め言葉か分からない台詞を吐いた。

「面白いから死なせてくれたわけ？」

「そーだよ。通常の状態だと肉体と魂は離れないし、ぼくら天使にも分離出来ない。でも、あの時のキミは切れ掛かってる状態だった。だから、ぼくにもキミを連れて来る事が出来たダヨ」

「……」

「不満？あのままだと苦しんで苦しんで辛かったと思うけどナ」

「そうだろうね。物凄い衝撃で吹っ飛んだのは覚えてるし」

「ぼくはね。キミと話してみたかったんだ。だから連れて来たノ」

「どうして？」

「若いコのクセに、ものすんごい考え方持ってるから見てみたかったタ」

「見たい？訊きたいじゃなくて？」

「見たかったのは魂。魂がどこまで変わってきているかを見たかったんダ」

「魂って変わるものなの？」

「うん、変わる。学んでそれを受け入れたらね。キミは本当に面白い存在だし、ぼくを楽しませてくれたからチャンスをあげようと思うんダ」

「チャンス？」

「このまま天国に行くか、前世の記憶を持ったまま生まれ変わるかどっちがイイ？」

天国と転生の2択ってどーなのよ？
おかしくない？
天国と地獄どっちがいい？　って言うなら分かるけど。
変な2択だ。

「それは、チャンスって言うの？　微妙な選択肢じゃない」
「そーかなぁ。キミなら面白い人生を見せてくれると思うからこその提案なんだケド」
「面白いって……酷くない？それ」
「なんで？酷くなんかないし、まぁ前世の記憶を持って生まれてくるのはちょっとだけリスクがあるけど、記憶が無くて自分が行った事に対して後悔する率少なくなるじゃン？」

「リスクって？」
「前世の感情に引っ張られるってトコロとか。まっさらな状態から作り上げる人格じゃなくなるから、どうしても培ってきたマイナス要因が邪魔をするヨ」
「……」
「それでも、愛される事や愛する事を実感出来るよ、どれだけそれが幸せなのかヲ」

優しい眼差しで美少年天使は見詰めてくる。
どきりとして、呼吸が止まる。

「ぼくはね、キミに悲しいだけの真理を体験しただけで終わって欲しくない。だから、選んデ」
「記憶を持ったまま転生しろって事なのね？」

「うん。キミの要望も聞くヨ？」
「要望って？」
「どんな所に生まれたいとか、あるでショ？」
「う～ん……」

いきなりそう言われても、即座に思い浮かばない。

「ま、取り敢えず、こっち来テ」

手を取られて、あのでっかい大樹に案内される。
どーんと鎮座している大木は、凄く威圧感があるが、不思議と安心感もあった。

「幹に手を触れテ」
「えっと、こう？」

そっと右の掌を幹に押し当てる。
木の皮のごつごつ感が、触れた所から伝わってくる。
何の意味があるのかは分からないが、美少年天使を見詰めると。

「そうそう、それでどんな所で生まれ変わりたいか言ってみテ」
「え……」
「希望だよ。家族は何人とか、時代背景はどんなだとかあるでショ」
「えっと……」

思い浮かべる。過去自分が欲しかったもの。

「あたしを愛してくれる両親、兄弟が欲しいな、お兄ちゃんがいい」

さわさわと樹の葉が揺れた。

頭上を見ると、緑色だった葉っぱは銀色に光ってる。
幻想的だ。

「OKだって。他の希望も言ってみテ」
「え、じゃぁ、宇宙旅行が出来る世界で――」

嫌な時はいつも星を見ていた。
遠い遠い場所だけど、色々な冒険や未知と遭遇してみたいと空想に耽って気持ちを紛らわせていた、小さな自分。
幻想はどこまでいってもただの夢想でしかないのも知っていた。
想う事で心を保っていた。

「魔法とかも存在している場所に生まれてみたい」

馬鹿みたいな妄想。
夢を見る事で、悲しみから逃れられていた。

死んでいて、何も失うものが無いなら願ってもいいよね？
冒険したいとか。
ファンタジーに溢れてる世界とか。
銀河を超えてみたいとか。

そして――――愛されてみたい。
神様……そう願っても良いですか？

サワサワと銀色の葉がざわめいている。
頭上の部分だけじゃなく、大樹の全部の葉っぱが銀色に輝いていた。
キラキラと光ってて、荘厳な一枚の絵を連想させた。

「ＯＫだって。その望みは全て叶えられるヨ」
微笑みをたたえて美少年天使は、はっきりとあたしに言った。

「え？」
「輪廻の樹が認めてくれたんだよ。喜びなヨ」
「え？えええーー！？」
思わず大声を上げてしまう。

嘘でしょ？　嘘でしょぉぉぉぉ！！
百万歩譲ってＳＦは良いとしよう、だって、いつか誰が実現させるだろうから。
宇宙を旅出来るって夢と言うよりは、ずっと先の未来だからね。
魔法の世界って……ありえなくない？
混在出来ないと思ったのに！

「ふぁいやーとか、めらとか、ほいみだとか、けあるとか、やっちゃう魔法の世界だよ？いいの？本当にいいの？」

無茶な設定バリバリの世界ＯＫなんですか？

サワサワサワと枝が揺れ、答える様に輝く葉が音をたてる。
「うん、イイって言ってるヨ」
嬉しそうに美少年天使は笑って言う。

「この樹がＯＫすればそうなるの？」
「そうだよ～。ココに迷い込んだ者の行き先は、この輪廻の樹が決めるんダ」

キラキラ、サワサワと葉っぱが揺れていた。
そうだよ～って答える様に、風に舞うみたいに揺れ動く。

「無数にある世界の中で、キミにピッタリな世界があって行けるんだ。喜びなヨ」

美少年天使に、じ……っと覗かれる。

その時のあたしは、自分がどんな顔していたのか分からなかった。

「凄く、不安そうダネ？」

「え？」

「コワイのカナ？」

「えっと……」

どう答えていいのか分からずにいると、美少年天使が天使の微笑みをして言う。

「コワイんでしょ？イイヨ、ぼくがおまじないしてあげるヨ」

がふっ！！！　鼻血出そうな感じの。

く、クリティカルヒット！　間違いなしの。

なにこの可愛さ！！

おまじないってナニ？　なんなのーーーーぉ？！

「キミの魂が来世で輝きますように」

そう、言って美少年天使は両手を伸ばし、私の頬にそっと触れて来る。

一呼吸の後に。

ちゅっと言う音と共に、額に美少年天使のキスが落ちた。

えええええええええええええええええええええええええ

?!

目を見開いて、美少年天使を見詰め、口をぱくぱくしてしまう。
衝撃だ。衝撃の出来事だ!

なんだこれ?
なんだこれ?
どーゆうこと?

「フフフ。おまじないダヨ〜。この位の役得あってもイイでしょ?あ、それとも唇の方がヨカッタ?」

にこにこ顔の美少年天使に、あたしはあんぐり。
ぶっとび過ぎでしょ? それは、なんでも……。
この場合、あたしが役得なのよ……ねぇ?
美少年天使のデコちゅーだよ!?

一生分の運使っちゃったよ!
って、とっくに死んでるから一生じゃないじゃん!

「たのし〜ぃ。ホントキミって楽しいコだよネ」

あたしの混乱具合を見て笑顔を浮かべる美少年天使が、頭上を見てすっと表情を変えた。
はっとなって、彼を見詰めた。

「えっ!?どうしたの?」
「時間ダ」

少し寂しそうに小さく笑って、美少年天使が告げた。

「時間？」
「うん、お別れの時間。樹に背中を預けテ」
「……こう？」

くるっと反転して、背中をぴったり幹に着けて問い掛ける。
美少年天使は、頷いて一歩近付いてあたしの目の前に立つ。

「うん、そう。ねぇ、一つだけぼくのお願い聞いてくれるカナ？」
「お願い？」
「キミの名前を頂戴」
「名前？いいよあげるよ。どーせ、好きな名前じゃないから」
「思い出せなくなるけどイイノ？」
「欲しいんでしょ？」
「うん！欲しい！だから、頂戴」

美少年天使の強請る仕草もなんか可愛い。
彼にとっては、貰って嬉しいものなのかな？

あたしは、自分の名は好きじゃない。
親が付けた名前じゃなければ、そんなに嫌いにならなかっただろう。
皮肉的な名前に泣いた事もある。

うん、そんなに欲しいならあげる。
今のあたしにあげられるものはないから。
喜んでくれるなら、あげる。
あんな名前でいいなら、貰って下さい。

「うん、あたしの最後に良い思い出をくれたからあげる。あんなん

で良ければ貰って」
「嬉しいナ。アリガト」

本当に嬉しそうな、輝くような笑顔で、美少年天使が微笑む。
どきりとして、声を出せず息を呑む。

その刹那――。
あたしの頬に影が落ちる。

「……んっ」

美少年天使の柔らかい唇が、あたしの唇を塞いでいた。

頭の中が真っ白になった。
触れるだけのキスだった。
直ぐ離れていった。
少し翳りのある笑顔が目に入る。

「有り難う。これでお別れだけど、キミの名前があるから寂しくないヨ。キミの名前、ずっと大事にするネ」
「……名前？」

自分の名前が思い出せない事に気付く。
美少年天使が、あたしの唇をそっと人差し指でちょんと触れる。

「言えないでしょ？さっき貰ったからネ」
「……あっ！」
「サヨナラ」

呆然としてると、トンと両肩を押された。

がくんと、半身が樹の中へを入り込む。
樹の幹が無くなっているかの様に、倒れ込むながらあたしは落ちていく。
物凄い速さで真っ暗な穴に、真っ逆さまに落ちていく様な感覚に全身が包まれる。
怖くは無かったけど、いつの間にかぷつりと意識が途絶えていた。

樹の前で、美少年天使がぽつんと立っていた。
エメラルドグリーンの瞳が、寂しそうに樹の幹を見詰めていた。
そして、祈る様にぽつりと呟く。

――――「幸せになりなよ、愛花（あいか）」――――と。

死天使とあたし（後書き）

死天使君が暴走しました。
名前は最後まで告げませんし、最後はほっぺにちゅーだったのに！
そして、主人公の名前は死天使君だけのものになりました。（笑）

実は、この章難産でした。（ーー；）
最後まで読んで下さいまして有り難う御座います。

はじめまして。

ユサユサユサユサ。
ちょっと強い感覚で揺さぶられる。

――――だぁれ？まだ眠っていたいのに……。

バチーン！！と叩く音。
途端、激痛によって、あたしは覚醒した。

「おぎゃあ！《イタイ》おぎゃあ！《いたいよー》おぎゃあああ！！《なにすんのよ！》」

ん？
声が出てない？
言葉になってない？

口から出たのは、赤ん坊の泣き声だけだ。

「一時はどうなるかと思いましたが、これで一安心ですね。マスター」
そう言って布にあたしを包むのは、瞳と長い髪は瑠璃色の中性的な美人だった。

でも、感情が一切入っていない感じだ。
物凄く違和感がする。

「では、通常任務に戻ります。何かありましたらお呼び下さい」
「解っているわ。有り難うね、ラピス。外にいる二人を呼んでくれ

る？」
「はい。了解致しました」
あたしをベッドに横たわる人に渡すと、その部屋から出て行ったようだ。

どうして出て行ったようなのかって？
だって、首が回らないから、目で見える範囲しかここがどんな所か解らない。
視界は物凄く狭い。
見えるのは目の前にあるものだけだ。
左右には、あたしを包む布がもっさり（？）してる。

目の前には疲労の濃い顔をした、美女。
化粧はしてないのに、すっきりとした顔立ちと少しきつめの目元が印象的。
瞳の色はエメラルド、肌は疲労のせいだろうか青白い、頬にさらりと流れるストレートの白金の髪。
あたしを見詰めて。

「ああ、良かった」
安堵の声を上げて、微笑みを浮かべていた。

「母様！」
声変わりのして無い声がする。

「ユーナ！大丈夫かい？」
低いテノールの優しい声が、美女に掛かる。

「貴方（レオン）！コウ！」
美女が破顔した。とても嬉しそうな笑顔だった。

声を掛けた二人が、どんな人なのか見たいな～と思っていたら、ふわりと体が浮いた。
視界がぐるっと回る。
目に飛び込むのは、真っ白い簡素な内装と、出っ張った壁らしき所にデスプレイ（モニタのようなもの）がはめ込まれ何かを映し出していた。
その下に、動く机の様な物の上に、ノートパソコンみたいなものと、太いペンみたいな物が置かれていた。
見たことも無い空間だった。

「父様！僕にも抱かせてっ！」
「だぁめ！俺が先だぞ、コウ」
あたしの真下の方で、男の子の声がする。
懇願をいとも容易く制するテノールの美声と共に、その声の主があたしを覗きこんで頬擦りした。

「逢いたかったぞ、俺の可愛い愛娘～っ」
嬉しそうに言うと、あたしを高い高い～ってして、頬にちゅっと口付けをした。

テノールの美声の主は、柔らかな金髪で、ちょっとタレ目の青い瞳で、肌は小麦色で、マッチョ過ぎない均整の取れた体格の美丈夫だった。
美丈夫の足元で、不満げな表情で見上げる美少年が一人。

「父様！ずるいーーっ！」
「レオン、コウにも抱かせてあげて下さい」
「しょうがないなぁ」
残念そうに言い、美丈夫ことレオンはあたしをそっと渡した。

きらきらとした眼差しを向けるコウ少年は可愛い。
瞳は青でサファイアの様、髪はサラサラした白金の糸の様、肌は白く、まるでお人形さんのようだった。

「僕は、君のお兄ちゃんだよ～。よろしくね～」

幸せそうな笑顔で、あたしに言った。
この3人があたしの家族なんだ……。
こそばゆい感じだけど、胸の奥がじ～んとなってしまう。

「あ、あ、あ、泣いちゃう?」
お兄(コウ)ちゃんの慌てた声に、はっとなったが抑え切れなかった。

感情と意識と肉体とが同調しれてないから、泣きそうになったら止められない。
涙と声が爆発する様に出ていった。

「おぎゃあああああ《うえぇぇん》」
「泣かないで、泣かないで」
「お兄ちゃんは怖くないよ～よしよし」
兄(コウ)は必死に泣かないでと声を掛けて、父(レオン)は、ぽんぽんぽんと背中を優しく叩いてくれる。

でも。
逆にその優しさが、一心に向けてくれる愛情が嬉しくて、涙が、感情が止まらない。

「おぎゃあああああ《うれしいのありがとう》」

あたしは泣き止む頃には泣き過ぎで疲れてしまい、いつの間にか眠りに落ちていった。

はじめまして。（後書き）

次回、主人公の名前が出ると思います。（＞ω＜；）

家族構成です。

母：ユーナ・アマハ

父：レオン・ルシェルシュ・アマハ

兄：コウ・ルウィン・アマハ

ナツキ・ルウィン・アマハ、イコール、私。（前書き）

やっと出ました。主人公の名前。（^―^；）

ナツキ・ルウィン・アマハ、イコール、私。

アマハ家の娘になって、あれから5年の月日が流れた。

あたしこと、私＝ナツキ・ルウィン・アマハは5歳になった。

前世の記憶については、私が危惧していたよりもかなり軽い荷物になっていた。

どうやら、死天使が名前を持っていったのが功を奏したみたいだ。

名前が思い出せないだけで、辛い記憶も半減するのには驚いた。

自分の事なのに、まるで本を読んで感情移入しているかの錯覚を受けた。

それを見越して奪ったのかは、死天使こと美少年天使の胸中しか解らない。

いずれにしても感謝しても、し足りないくらいなのは事実だった。

あ、私の容姿はびっくりするくらい可愛い。

髪は父様から受け継いで、瞳と肌の色は母様から受け継いだ。

ふわふわの金髪は背中まであり、瞳はエメラルドの宝石をはめ込んだみたいで、肌は陶磁器のような白で、どこかにぶつかったりすると直ぐ痣になるのでもう大変。

兄様のコウも人形さんっぽかったが、私も同レベルだった。

初めの頃は鏡に映った自分の姿に慣れなくてぎょっとした。

どこの美少女か！？　って、何度思ったことか。

やっと、今はもう慣れて、あ、映っているのは自分なんだって解

るようになりました。

ナツキ・ルウィン・アマハ、イコール、私。（後書き）

次がちょっと長めになりそうなので、分割しました。

スターシップ・リュシオル

「ねぇ。ラピス、ラグナリア星ってどんなトコロなの？」

今私がいる所は、宇宙船（スターシップ）の操舵室（メインブリッジ）。

メインスクリーンの前にあるパネルと椅子に陣取って、映し出される宇宙空間を眺めていた。

その中央に位置する場所（船長席）には、床から伸びる接続端子を後頭部、首筋、手等に接続し椅子に座っているのがラピス。

出産の時、私を取り上げた、瞳と長い髪は瑠璃色の中性的な美人は、人工知能ＡＩを搭載したアンドロイドなのだ。

ただのアンドロイドではない！

なんと、この宇宙船（スターシップ）リュシオルのメイン知能でもあり、宇宙船そのものでもある。

『一言で言えば、魔法惑星ですね』

メインスクリーンは宇宙空間を映し出しながら、別枠で右端にラピスが映る。

『詳しく知りたいのでしたら、資料がありますから出しましょうか？』

「う～ん、詳しく言われてもわからないかも」

椅子に腰掛けながら、足をぶらぶらさせて答える。

私が今日着ているのは、淡いピンク色のワンピースで、足をぶらぶらさせる度に裾のヒラヒラのレースが揺れる。

『それでは、ざっとお教えしますね』

「うん」

『ラグナリア星は、皇制度によって統治されています。現ラグナリア星皇陛下は、セリティア・ラグナリア女王陛下で、我がマスターでありナツキ様のお母様の親友でもあります』

ぱっと画面が切り替わる。

映し出されたのは、髪は銀茶色、紫の瞳、肌は真珠のような白で、美しいルビー色のドレスを纏い、王杓を手に持ち、頭には王冠を被り威風堂堂とした姿の女性だった。

「この人がセリティア女王陛下？」

『そうです。このフォトは5年前の戴冠の時のものです』

「カッコイイね～」

『次に、大陸についてですが。大きな都市は、東西南北中央に分かれてます。東は王立聖騎士団があります。西が宇宙科学工業都市で、宇宙港もここにあります。南が魔法学園都市。北が王都で王宮があります。中央が中央都市で国民の大半がここに住んでます。後は細かな地区などがありますが今回は省きます』

５つの都市のデータ画像が、パパパパッと画面に映る。

それぞれの都市は、特色のある作りだった。

王立聖騎士団のある地は田舎っぽくて、宇宙科学工業都市は未来的で、魔法学園都市は緑と学校が融合した独特な雰囲気で、王都は中世ヨーロッパの様な感じで、中央都市は住宅やビルなどが多い都市だった。

『南の魔法学園都市には、マスターユーナが学院長をされているジ

ユラーレ学院が御座います。学院では、魔術科と宇宙科が学べます。ナツキ様もここにご入学される事になるでしょう』

「ふぅ～ん」

あまり実感が無い為、生返事で返す。

母様は、魔法界の女帝と言われる存在なんだけど、私の前では普通に母親でいるのでイマイチピンとこない。

父様は、婿養子で宇宙考古学者をしてて、あっちこっちへ行っている。

魔法も結構使える人らしい。

二人とも私の前では魔法を殆ど使わないので、どれだけ凄い人達なのかが未だに解らない。

兄様は良く色々見せてくれるが、私の前で使ったのがバレると母様と父様に怒られるらしい。

どうやら、私は魔法（魔力）に関して何か問題を抱えているらしい……あくまで推測だが。

でなければ、二人が私に魔法を使いたい時は必ず言いなさいなんて釘を刺す理由が見付からない。

真剣に言われたので、好奇心で魔法を試そうと思っても試みた事は無い。

ある程度、理解出来るようになったら教えてくれるのだろうとは思っている。

「そう言えば、コウ兄様、来年から学院行くって言ってたね？」

本来なら１３歳から入学するのだが、母様や他の人達に習っているから１５歳から入る事にしたらしい。

２年分のブランクは飛び級で何とかするようだ。

『コウ様はナツキ様の事が気掛かりで、出来るだけ入学を延ばしてたそうですから』
「……コウ兄様は、シスコンよねぇ～」
『ええ、それはそれは、ナツキ様の事を目に入れても痛くないほどの可愛がり様ですから……ジュラーレ学院に入っても毎日欠かさず連絡が入りそうですね』

「クギ刺しておかなきゃダメかもしれないね？　毎日連絡ってイロイロとモンダイでしょ」
『それは……なさらない方が良いのではないでしょうか』
シスコン振りを知っているラピスは提言する。

しかし、私としては何は無くともまず私に連絡して、それから勉強や学友達との交流などと言う構図が見え過ぎてて非常に怖い！

間違いなく「可愛い妹に連絡してから行く（する）よ！」って宣言するに違いない。
そんな兄様見たくない！

１０歳の時の兄様は、お人形の様だったが今では美少年から美青年へと変貌を遂げる過程の真っ最中で、どちらかというと可愛い要素よりもカッコイイの要素の方が比率が大きくなっている。

ふと見せる仕草なんかは可愛いんだけど、頼れてカッコイイ、自慢の兄様でいて欲しい。
なので、兄様のシスコン振りをあっちこっちで露呈するのは、妹として阻止すべき重要案件だ。
心の中で決意する私に、ラピスが言った。

『お母様（マスター）から、先ほどナツキ様にお部屋に来る様にとご連絡が入りました』
「母様が？」
『はい。後、1時間程でラグナリア星系内へ入りますから、星へ降りるご準備かと思われます』
「じゃあ、お部屋に行くね。あ、星見せてくれてありがとうね！」
『喜んで頂けたら光栄です。また、見たい時は言って下さい。何時でも歓迎致します』
「うん！じゃ～ね！」
メインモニターに向かって、バイバイと手を振る。

部屋の真ん中にラピスの身体があってちょっと違和感があるのだが、モニターに映っている時は身体の方は抜け殻の状態なのでモニターの方が本体と言う事で認識している。
そうして、私は操舵室（メインブリッジ）を後にした。

ラグナリア星に来たのは、明後日に催される、セリティア・ラグナリア女王陛下戴冠5周年を記念したパーティーに参列する為だった。

女王陛下戴冠記念パーティーがどんなものか興味津々だが、着飾って出席するとなると色々とマナーとかあって気後れしそうだ。

こっそり覗き見する程度なら嬉しいんだけど……。
と、絶対無理な願いだとわかっているが、ついついそう思ってしまうのは前世の庶民癖のせいかもしれないね。

スターシップ・リュシオル（後書き）

コウ兄様、頼れてカッコイイ、クールビューティーが、いつの間にかシスコンになってしまいました。（涙）
次回出るかも？シスコン兄様！？（笑）

余談メモ。
リュシオルは日本語だとホタルです。
ジュラーレは誓いです。

女王陛下と母様と父様

ラグナリア星、唯一の大陸『アイフィロス大陸』北部にある王都そこでは、本日から3日間、街を挙げてのお祭り騒ぎであった。

才媛の美姫と謳われ、女王となったセリティア・ラグナリア陛下の在位5年目（戴冠5周年）を記念にした式典&夜会が王宮では行われる。

そのお祝いかこつけたお祭りが、街中の公園などで市民主催で行われてもいた。

女王陛下は意外とこの星の民には、人気の存在であった。
民の声を聞きその声と取り入れたり出来る豪傑な人でもあり、人柄も民から慕われていた。
その為か、彼女が王になって5年目なんだから、お祝いしようと言う事で街を挙げてのどんちゃん騒ぎに発展したとか何とか。

公園内には出店が出たり、音楽の道を志している者や本職に至るまで園内で音楽を奏でたり、舞踏家（ダンサー）はその音楽に合わせ踊りを披露したり、夜には花火が打ち上げられたりと、かなりの盛り上がり具合である。

「……」
そんな街の様子を馬車の中から見て、私は唖然とした。

物凄い楽しそうな皆の姿に驚いた。
今日は、驚きの連続でなんともいえない心境になっている。

だってねぇ～。大陸の西部の宇宙港から、どんなエアカー（反重力で動く車）に乗ってどんな道を走るのかと思ったら……地下だった。

碁盤の目の様に張り巡らされた地下道を走るエアカーに乗って、目的地に近い昇降口で下車し地上へと戻る。

このエアカーなんと国民は皆タダだそうな。

その代わり、地上にあるのは人力車や馬車や鉄道で見目の良い感じの作り、観光にも活用されている。こちらは国民も有料。

多少の不便があっても、職業に就ける要素をと言う事でそう言った政策を取っているんだって。

その甲斐あって、エアカーで遠方から働きに通えたりと国民にとっては物凄く重宝し、かつ恩恵を受けるという良い循環を作り出していた。

宇宙港からここへ来るまで、女王様を讃える垂れ幕をみたり、詩を歌ったりしている人を見た。

そんなワケで、女王様は超人気者だった。

そんな人と母様が親友って、どんな経緯が合ったのか知りたくなった。

「ねぇ、母様？女王様とおトモダチなんだよね？」

向かい側に座る母に問い掛けた。

今日の母様はの髪型は、綺麗な白金の髪をポニーテールにしている。

瞳の色と同じエメラルドカラーのピアスとネックレスをして、服は生成り色の生地に華麗な刺繍を施したパンジャビ風ドレスを着ている。

異国情緒溢れる衣装なのに、さらっと着こなしていた。

「ええ、そうよ」
「どんな人なの？」
「そうねぇ……強くて、人を見る目があって、自分が認めた人には優しい人だわ」

「強い人なんだ？」
「ええ、強いわよ～。何て言ったって私とレオンを取り合った人だもの」
「へ？」
私の口から間抜けな声が出た。

レオンって、父様のことよね！？
女王様と取り合ったの！？
それは、マジですか母様！

恐る恐る聞き返してみる。
「母様、今、父様を取り合ったって聞こえたけど？」
「うん、そうよ。でも、セリティア……セリは最終的には諦めちゃったの」

「諦めたって？」
「女王になると決めてたから。私もセリも、父様（レオン）にとって宇宙考古学が何よりも大好きなのを知ってるから、彼を星に縛り付ける事になるのを由としなかったの。だから、身を引いたのね」

「で、私が猛アタックして結婚したの。それこそなりふり構ってなかったわね。学院を卒業する前に何とかしなきゃって」
「母様、もしかして学生結婚だったの？」

「頑張ったのよ～。最後はコウのお陰で結婚出来たんだけどね」

「……」

ニコニコ笑う母様に、私は呆然するしかない。

これは、間違いなく、父様が罠にハマったんだろうなって思う。

それでも、父様が母様の事を愛してるんだろうなって事はわかる。

父様が帰って来る時は母様も凄く嬉そうだし、父様も母様に会えた時の表情とかで嬉しいんだろうなって分かる。

愛妻家で、家族思いの父様だ。

時々だけど、私に対してねちっこい。

構わないと妙に拗ねて、うだうだと言うのよね。

毎回「父様お帰り～大好き～！」ほっぺにチュー出来ません。

我が家の儀式なんだけどね～。

母様と私が、父様と兄様にお帰りってすると。

父様と兄様が、私と母様にただいまってするの。

逆もまた然り。

ほっぺにチューは挨拶であり、神聖な儀式でもあった。

でもね！　でもね！！

恥ずかしいのよ！！

父様と兄様は、美形さんだから特に！

実の父と兄にときめいてどーすんのさー！　と、何度突っ込んだ事か。

困るね本当に。

人前でもやらされたりするし、この先なんとかしないといけないよね。

ラブラブ家族恐るべし！！

この王都にある、母様の実家『アマハ家』邸宅に馬車は着実に近付いていた。

父様と兄様の待っている邸宅です。

私が確実にやらされるであろう儀式に、小さく溜め息が零れたのは言うまでも無い。

女王陛下と母様と父様（後書き）

余談小ネタメモ。

常緑樹＝アイフィロス

父と兄の攻防戦（笑）

な、なんじゃこりゃあああああ！！！！？？？？

と、思いっ切り心の中で叫んだ私。

いやもう、どびっくりですよ。

王都ってどこもかしこも観光都市だね！

中世ヨーロッパに迷い込んだ様な、街並みが広がっているだけじゃなく。

アマハ家の自宅（？）も、お城ですよ。豪邸です。

お姫様気分を味わえるけれど、庶民からしたらちょっと怖い感じです。

入り口のホールも大きくて、なにここホテルじゃないん？　って思うほど。

飾ってある花瓶とか割ったら、損害多そうで怖すぎ～～～ぃ。

入り口で「お帰りなさいませ」と待ち構えていたメイドと思わしき人もいたが、その内何人がアンドロイドなのかは傍目には解らない。

実質、半数以上はアンドロイドだとは思う。

機密保持の為とかで、信用の出来る人間しか周りに置けないんだとまえにぼやいていた事があったし。

美術館の様な回廊を歩き、父様と兄様の待っている部屋へと案内される。

「こちらでございます」

感情の入らない声で、メイドがドアの前に立つ。

「何か御座いましたら、お呼び下さい。ご主人様（マスター）」
「解ったわ」
口調と任務をこなしている体からして彼女はアンドロイドだ。
ぺこりと頭を下げて、身体を反転し何処かへと歩いていく。

コンコンコン。
母様が木製の扉のドアを叩く。
慌てた様な音が聞こえ、扉が勢い良く開かれる。

「お帰り、二人とも！」
満面の笑顔で、父様のレオン・ルシェルシュ・アマハが両手を広げて待ち構えている。

「ただいま、レオン」
父様の頬にちゅっとキスをして、母様は父様と抱き合う。

金髪、青瞳の、小麦色の肌と違和感無い均整の取れた体格の美丈夫と、美女の二人が抱き合う姿は絵になるなぁとのんびり見てしまう。

「ここに来るまで問題はなかったかい？」
そう聞きながら、父様が母様に頬にキスのお返しをする。

「ええ、何も問題なかったわ」
「それはよかった」
うんうん、と頷いてから父様は母様から手を離し、私の方へ視線を合わせる。

うっ！　ヤバイ、美形パパがロックオンしたぞ！
思わず、足が後退しそうになる。

「ナツキ、どこ行こうとするのかな?」
父様は微笑んでいるが、どこか咎める口調だ。

「え、どこにも行かないよ?何言うのかな?父様は」
あはは、と笑って誤魔化す。

「じゃぁ、おいで」
父様は私の背に合わせる様にしゃがみ込んで、腕を広げた。

ううう。
ハズイよー。公開処刑だよねコレ。
ええい、飛び込まなければ更なる悲劇（笑）が待っているんだから度胸を決めるのよ、私!

「ただいま、父様〜」
笑顔を貼り付け、腕の中に飛び込む。

すると、軽々と抱き上げられ。
「会いたかったよ〜。愛しい娘（ナツキ）」
私がほっぺにキスする前に、父様からの熱烈な、ほっぺにチューが降る。

「〜〜〜っ！　くすぐったい〜〜」
私が腕の中でじたばたしてると、父様の足元でごすっと音がする。

「痛いぞ、コウ」
サファイアの瞳が父様を睨んでいる。

白金の髪をかき上げて兄様、コウ・ルウィン・アマハが言った。

ごすの音源は、兄様（コウ）の足蹴りだった。

「父様こそ、独り占めはダメだって言ってた筈だ！」

成長した兄様は私を奪い取れる位の身長を得ていたので、私を父様から奪い取る。

「大丈夫だったか？」

「……えっと、うん」

貴公子の笑顔を向けて来る兄様に、どきまぎしながらこっくりと頷く。

「元気そうで安心したよ、お帰り、ナツキ」

「うん、ただいま。兄様」

兄様の頬を両手で添えながら、軽くちゅっとキスを送る。

嬉しそうな笑顔で笑う兄様は、ステキだ。

これが、私限定ってトコロが嬉しい気持ちもあるが、先行きが不安にもなる。

シスコン街道まっしぐらは……ね、イタダケナイよホント。

「コウ！お前だけずるいぞ！！ナツキ、父様にもして！」

美形パパの顔が歪む。

――――泣きそうになんないでよ。私が悪いみたいじゃない。

「……父様」

ちょいちょいと手招きして、近付いた父様の頬にキスをする。

「ナツキ～～ぃ」

父様が破顔して私を抱きしめようとするのを兄様が、ひょいっと

避ける。

父と息子の間に火花が散る。
お人形宜しく抱き上げられている私は、逃げようがないので困る。
助けを求めるように母様を見ると、楽しそうに笑っている。
間違いなく、面白がっている。
収集つかなくなる一歩手前まで、観戦する気だ！

誰か助けて～～～～～～～～っ！！
私は、心の中で叫んだ。

父と兄の攻防戦（笑）（後書き）

兄様＆父様が出てきました～。

王宮へ

ゴテゴテした派手な外装ではなく、洗練されたシックな感じの嫌味にならない美しい細工が施された馬車から、初めは父様、次に父様の手を借りながら母様、そして、兄様が私の手を取り、誘導してくれるが覚束無い足取りで恐々降りる。

桜色のフリルやらドレープやらが引っ付いた、ゴージャスなドレスに身を包み、履き慣れないちょっと踵が高いヒールを履いていれば足元も心もとなくなっても仕方ないよね。

今、私たち家族がいるのは王宮の正面に位置する場所で、今夜の夜会に呼ばれた招待客が馬車で乗り付けられる様にと入場時間を設定して解放されている。

招待客を乗せて来た乗り合い馬車は、そのまま通常業務の関連で街の方へと戻るが、持ち主がいる馬車は厩舎の方で預かりとなる。

御者にはアンドロイドの一人、カラールが担っていた。彼女はショートの黒髪黒目で、一見すると男性にも見える顔立ちだった。服装も黒で固めて、ストイックな出来る人って感じだった。

警備している騎士っぽい人がカラールと何かを話していて、彼女は頷くと御者台に乗り馬車をゆっくりと走らせていく。

乗って来た馬車はアマハ家所有のものだから、厩舎の方へと行くのだろう。

「ナツキ？どうした？」

「え？」

はっとなって、声がした方に顔を向けると、燕尾服に身を包んだ兄様がじっと見詰めていた。

「緊張してるのかな？」

「あ、うん、そうかも……」

「なら、ずっと俺の手を握っているといい。もし、変な奴が来たら追っ払ってやるからな」

ぽんぽんと、頭を優しく叩いて笑う兄様を頼もしく思いながら私は答える。

「うん、ありがとう。兄様」

「任せておけ」

ウインクして答える兄様は、素直にカッコイイ。

これはこれで、年頃の娘さんは放って置かないのではないかなぁ？　って思う。

引っ込み思案なタイプはまず来ないだろうけど、イケイケタイプは間違いなく「どこからいらしたの？」とか「1曲踊って頂けますか？」ってのはありそうだ。

流石に妹と踊りますなんて言う、兄様の回答は無いとは思うが。身長的に無理だからね～。

ガラガラガラガラ……。

次の馬車が入ってくる。

「入り口へ入って奥へお進み下さい。入り口に付近に案内の者がおりますので、お困りの際はお声を掛けて下さい」

警備の騎士っぽい人が父様と何かを話してから、私達にも聞こえ

る様に言った。

「コウ、ナツキ、行きますよ」
「はい、母様。行こう、ナツキ」
「うん」
兄様の手をしっかり握って、足を踏み出す。

目に前にあるのは豪奢な宮殿。

いつの時代も、王様ってのはこう言う建物大好きなんだろうね。
右端から左端までの全長ってどの位だろう？　って位に長い。

白壁に空色の模様が描かれていて綺麗だ。
扉は木製で左右にが開くタイプで、精緻な金の細工が施されていた。

扉の前には、騎士らしき人が二人いて、敬礼をしてから左右の扉を二人が開けてくれる。
ゆったりとした足取りで、母様と父様が中へと入っていく。
私は、兄様に手を引かれながら一緒に中へと進んでいく。

お城の中に入った、私の素直な感想としては。

広い！　でかい！　綺麗！　超豪華絢爛！

眩暈がしそうになる程の豪華さに、圧倒される。
そして、広過ぎるよ！
廊下も長いし！
同じ様な扉が一杯だし！

はぐれたら、絶対迷子になるよね、この広い中じゃ……。
気を付けないと大変だ。
うん、兄様の手を離さないか、父様か母様にべったり引っ付くしかないかも。
そう、私は心に決めた。

危機的状況（前書き）

分割ＵＰです。

危機的状況

が。しかし！
そうそう、物事は上手くいかない事もあるんだって事をすっかり忘れていた。

５０メートル×２０メートル位の豪華絢爛な大広間に、右側には立食出来るテーブルが端に並べられてあり、かつ給仕に付いているのが解る同じお仕着せの男女がトレーとナプキンを持って控えいた。

左側上部には、楽器を持った人達が何時でも弾ける体制で待っている。

最奥の場所は一段上になって、一客の豪奢な椅子は女王陛下が座る場所になっていた。

ド緊張しながら、アマハ家一家全員で女王陛下の前で挨拶をして、夜会が始まってその場の雰囲気に慣れ始めた頃に事件は起こった。

うわ～～！　すごぉ～～い！！
貴族の世界だ！　ダンスパーティーだっ！　と浮かれました。

ええ、おのぼりさんの如く、周りをキョロキョロ見回し。

あれはなに？
これはなに？
って、好奇心丸出しで見てた私が悪いんだけどね。

兄様がお姉さま方に群がられ、その勢いが壮絶で思わず手を離してしまったが最後、あれよと言う間に引き離されてしまった。

大広間の中にいれば見つけて貰えるだろうと思って、食べ物があるテーブルに行って暫くの間、デザートを貪っていたんだけど。

チョコレートケーキとか、ゼリーとか、チーズケーキとか色々あって美味しかった。

流石にお腹一杯になってしまったので、広間の中にいる美形さんをウォッチングしたりして暇を潰していたら。

「お嬢ちゃん、迷子なのかな？」

と、紳士ぶったハゲかけの中年太りのおっさんが、見下ろしていた。

「違うよ。兄様を待っているだけ」

ちゃんとそう答えたのに、おっさんは私の手首を掴んで力任せに引っ張る。

「仕方が無いね。おじさんが受付へ連れって行ってあげよう」

「ちょ！離して！」

声を上げたが、テンポが良く派手な伴奏と歓声で掻き消されてしまう。

女王陛下と誰かが、踊る姿を視界の端で見える。

周囲の目がそこへ集中する。

その上、私の居た所が入り口付近だったのが災いして、子供の力では振り払えない力で引き摺られる様に外へと連れて行かれる。

「離して！離してよ！！」

騒ぐ私の口を素早く片手で塞ぐ。

「んーんーんんん！！」
「どうかされましたか？」
入り口に居た見張りの騎士が、何事かに気付き声を掛けて来る。
おっさんは笑顔を張り付かせて。
「いえね、家の姪が癇癪を起こしたので連れ出すところなんですよ。迷惑を掛けたくないもので」
へこへこと頭を下げて謝る。
「ああ、そういう事ですか。失礼致しました」
「んんんんんんんんーーーー！！」（訳：騙されんな！馬鹿ーーー！）
私は騎士に向かって突っ込んだが、気付きもしない。
「では、失礼します」
おっさんは、してやったりの顔つきで、小走りに入り口付近から退散して行く。
「んんんんんんんんんんん！！！」（訳：能無しめえええええ！！！）
私は引き摺られながら、状況を見定めない騎士に罵声を浴びせた。

危機一髪

そうして、私が連れ込まれたのは庭園だった。

如何わしい事をするなら、どこかの部屋でもいいだろうに何で庭園？　と思わず思ってしまう。

「さあて、お嬢ちゃんには役に立って貰わないとね」

突き飛ばされる様に手を離されて、よろけて緑の絨毯の上に尻餅を着く。

「っ！」

見上げるとおっさんは、下卑た笑いをしている。

正直、気持ち悪い。

それと、今さっき役に立ってって言ったよね？　コイツ。

元々、私を狙っていたって事？

どうしよう、逃げるにしてもどうやって逃げようか。

視線だけを動かして、逃げ道を探す。

まずは、相手を油断させる事が肝心だ。

「私、あなたの事を知らないのに、どうしてこんな事をするの？」

泣きそうな感じで目蓋を少し伏せて言ってみる。

「悪いのは、全部お嬢ちゃんの母親だよ。怨むなら母親を恨むんだな」

憎憎し気に言うこのおっさんは、どうやら母様に因縁があるらしい。

「宮殿内は色々と魔術が施されているから、何かしようものなら騎士や他の連中が飛んで来るからな。ここだったら大丈夫だろうから。どうしてやろうか……」

ぶつぶつと呟くおっさんは、気持ち悪い。

室内を選ばなかったのは、見付かる確率が高いからだったみたいだ。

と、言う事は本気で逃げないと危ないのね、私。

「そうだ。いい事を思い付いたぞ」

「え？きゃ！」

小太りのクセに手癖は早いらしく、右手を伸ばし私の柔らかい金髪を無造作に掴み吊り上げる。

「ふん！いい気味だ」

おっさんは、にやりと笑いながら言う。

「痛い！痛い！」

引っ張り上げられた髪を押さえつつ抗議する。

あ～～！　も～～！！　何で転生してからもこんな目に遭うのよ！髪引っ張られるの地味に痛いんだよね！

遠い昔に前世の父親にやられた記憶が蘇る。

こういう時どうしてたっけ？　思い出せ！　私！！

とりあえず、足は地面から離れていない。

よし、なら、やることは一つ！！

弁慶の泣き所を目掛けて、思いっ切り蹴りを放つ。

「このっ！！！」

ついでにヒールの先をめり込ませて蹴ると。

「ぐぁ！！」

悶絶の声と共に、私の髪からおっさんの手が離れる。

徹底的に蹴倒したいが、如何せん分が悪い。

ここは逃げるか勝ちだろうと思い、建物に向かってダッシュで走る。

もう少しで建物の近くになろうという所で、足に何かが絡んで転倒してしまう。

「いたたた……」

足元を見ると、変な蔦のような物が足首に絡まっている。

「ナニコレ？」

手で外そうとしても外れない。

「やっても無駄だよ」

「っ！！」

声のする方向は、逃げて来た方向だった。

「流石はあの女の娘だ。忌々しいな」

ゆっくりとした足取りで、近付いてくる。

「来ないで！」

言ってみたが、無理だった。

「先程の礼だ」
おっさんは目の前に立つと、手を振り上げた。

何が来るか解ったから、目を瞑り歯を食いしばってやり過ごす。
バチン！！　と頬を打つ音が響く。
目の前がチカチカする。
何度体験してもこの痛みは、いいものじゃないなと思う。

「小娘風情がこの俺を馬鹿してただで済むと思うなよ！」
激高しておっさんが、ガッと両手で私の首を絞めに掛かる。

「くっ……」
私は抵抗しながら、おっさんの手首に爪を立てる。

首絞められた経験は、前世でもあるけど！
この状況はヤバイ！！
本気で苦しい。
このままいくと、落とされるか。
マジで死ぬ！

「助けて……父様……あ、さま……に、い……ま」
喋る事も辛くなる。
呼吸も出来ない程に締め付けて来る。

嫌だ！こんなトコで死ぬなんてイヤ！！
助けて！！　助けて！！！
誰か助けてッ！！！！

意識が遠退く瞬間。

バーーンッ！！

と、轟音と地響きの様なものが辺りに響いて。
絞められていた手が、首筋から離れる。

「ぐ……は……っ！」

一気に気道に空気が入って来て、ごほごほと私は咽た。

周囲ではバチバチと電気がショートする様な音と、ピシッピシッとガラスにヒビが入るような音が絶え間なくしていた。

「遅くなってごめんね。大丈夫？」

咽こむ私に、誰かが声を掛け、手を差し伸べた。
涙目になりながら、私は顔を上げる。

年の頃は、私と同じか少し上かもしれない少年が立っていた。
月の光に照らされて輝く銀茶色の髪が風で揺れている。
じっと見詰める紫の瞳が幻想的な雰囲気を醸し出して、より一層少年の秀麗な表情を深いものにしていた。

「くそ。誰だっ、邪魔をするのは！」

怒鳴り散らす声がする。

さっきの衝撃で吹っ飛んだおっさんの声だった。
その声を聞き、紫の瞳がキラリと光を帯びる。

「陛下の庭でふざけた真似をしている癖に、その暴言は最悪だな」

「うぎゃ！！」

おっさんが潰れた声を出した。

「そのまま、潰れ蛙みたいにしていろ」
少年は一度おっさんへ一瞥して、私に向き直って。
「燃（カウシス）」
そう呟くと、両足の戒めが一瞬にして火に包まれて消え去る。
ほわっとした熱さを足首に感じたが、火傷などなく全然平気だった。
私は差し伸べられた少年の手に、自分の手を重ねる。
優しく、壊れ物を扱う様に、引き寄せられる。
「もっと早く気付いてあげられたら良かったのに。怖かっただろう？ごめんね」
「え？」
少年の紫の瞳を覗き込んだ、その時。
「前々から馬鹿だとは思っていたけど、ここまで大馬鹿だとはね。私の敬愛するお姉様の娘（こ）を攫った上、私の庭で危害を与えるなど言語道断よ！！」
少年の前方に、紅蓮の炎が巻き起こる。
炎と同じ色合いのドレスを纏った美女が出現する。
「女王様……」
怒りの炎を背負って彼女、セリティア・ラグナリア女王陛下はそこにいた。

危機一髪（後書き）

余談小ネタメモ。
カウシス＝燃焼

女王×美少年×オカマ？＝王宮は濃ゆい人達が一杯だっ（前書き）

分割してみました～。

燃え上がる炎に髪が煽られ、その横顔は壮絶に美しい。
美女はお怒りになっても綺麗なものなんだなぁ～と、私は思った。
妖艶な美女（クイーン）と、不可視の力により、潰れた蛙の如く地面に縫い付けられジタバタする小太りのおっさんとの対比は何だか凄いものがある。

「キッチリ、仕置きをしなくてはいけないわね。その前に、カグラ！彼女を連れて行ってあげなさい」
セリティアは冷たい視線を足元に投げ掛けた後、こっちを振り返って言う。

カグラと呼ばれた少年は頷くと、私の耳元で囁く様に告げた。
「少しの間だけ我慢して」
ぎゅっと、私は抱き締められる。

「え？あ、あの……？」
ワケの解らない展開に軽くパニックになる。

「サリーレ」
カグラが囁いた瞬間。

身体がふわっと浮き上がるような感覚と、視界が暗黒に包まれた。
数秒間の後、かくんとした感覚と明るい光が目に飛び込む。

しかし、私は、その感覚に酔った。

うえぇぇぇ。気持ち悪い～～。
何か、むかぁし、体験した事のある感覚ですよ。これは！
嫌いな人はいるよね、絶対。
エレベーターのふわっと浮き上がって、止まる時に落ちる感覚に酷似していた。
油断してたりすると、気持ち悪くなるんだよね、アレは。
そして、今、私はその状況になってます。

「もしかして、転移は初めてだった？」
私の様子を見て、カグラは心配そうに覗き込んで訊いて来る。

私はコクコクと、小さめに頷いて答えた。
「あらまぁ、それは辛いかもね。はい、これでも飲んで落ち着きなさいな」
カグラと私の側に一人の男性か、女性か解らない妙に派手な人がいた。

顔の造形は良い方だが、如何せん、髪はどピンクで、瞳は綺麗な澄んだ水色、身長は１８０位だろうか？　結構高い。
なのに！
極彩色の膝丈までの長い服を着て、革のサンダルっぽいものと履いていた。
勿体無いと思わず言ってしまいたくなる程の残念さを目の前の人から感じた。

ハスキーボイスだったので、彼？　彼女？　かはちょっと解らない人から水の入ったグラスを渡される。
グラスを受け取り、口元に持っていきながら、私は極彩色豊かな人物を凝視していた。
ちびちびと水を飲んでいると。

「アタシの事気になる？」
妙にオカマ口調な感じで、極彩色な人は言った。

私は素直に頷く。
こんなド派手な人を気にならないで、初対面でやり過ごす事の出来る人なんている訳ないじゃない。

「初めまして、アタシは王宮（ここ）の治療師で、名前はシエン・シア・メーディカよ。れっきとしたオトコよ。ヨロシクネ☆」
ウインク付きで極彩色の人、シエンが私に挨拶をしてくれた。

「あ、私は、ナツキ・ルウィン・アマハです。ナツキって呼んで下さい。あと、お水、有り難う御座いました」
ぺこりと頭を下げ、グラスを返すと。

シエンは微笑んでから、私の頭を優しく撫でる。
「酷い目に遭ったみたいね。さ、そこのベッドに座って」

指し示す方向には、大きめなソファーとテーブルがあり、その向こう側にベッドがあった。
「あ、はい」

「待って！」
歩こうとした私を、カグラが引き止める。

「え？何？」
「足、怪我してる」

「あ……」

足を見ると、転んだ時に擦り剥いた為に膝の辺りの生地が破れ、血が膝を伝って足首辺りまでを汚していた。

派手に怪我しちゃったなぁ……。
あーあ、折角のドレスが勿体無いなぁ。
きっと高価なものなのに。

冷静（のんびり）にそう思っていたら。

「ちょっと失礼」
カグラはそう言うと、私を軽々とお姫様抱っこをした。

「？＋＊＃％！！」
目を見開いて、声にならない叫びを私は上げた。

全くもって、意表を突いてくれる美少年だと思う。

頭一個分位しか身長差がないと言うのに、さらっと抱き上げてしまうなんて結構力持ちなんですね、カグラ君。

スタスタと歩いて、私をベッドの縁に座らしてくれた。

「カァッコイイ～、流石は王子よね～」

ヒューヒューと、シエンが言うと半眼で彼を睨んだ。

「俺は王子じゃない。間違えるな」

「あぁら、王子も次の王太子も変わらないじゃないの」

水が入った手桶のような物と、タオルの様な布を持ってケラケラと笑いながらシエンが言った。

「え？ええ？王太子？」

目の前に居るカグラと、シエンを代わる代わる見詰めるとびっくりした顔で。

「え、名乗ってないの？王子！？」

「だから、王子は止めろ」

そう言うと、はぁ……と息を吐いてからカグラは私を見た。

「俺の名は、カグラ・ジーノ・ラグナだ。ラグナ公爵家の長男だ。呼び方はカグラでいい」

「あ、はい。えっと、助けてくれて有り難う御座います。カグラ様」

「様はいらない」

「え、でも、公爵家の人なんでしょ？」

「い～のよ。様なんか付けて呼ばせたら、陛下に怒られるものねぇ？」

シエンが私の足元に、桶を置いて布を1枚その中に入れ、乾いたもう一枚を私の脇に置いた。

「ああ。だから、俺の事は気にせず、カグラと呼んでくれ」

シエンに頷いて答える、カグラを見ながらいいのかなぁって思うが、さっきの女王陛下の言葉を反芻してみる。

『私の敬愛するお姉様の娘』って台詞から察するに、母様の事が好きなんだって事が解る。

どんだけ、母様はこの国の中枢に食い込んでいるのやら。

考えたくないなぁ～～。怖いもん。

「裾捲るけど良いかしら？」

ぱちゃぱちゃと布を濡らして絞ると、シエンが私に告げた。

「あ、はい。じゃぁ、私、裾押さえてますね」

擦り剥いた箇所まで、生地を捲り上げて両手で押さえる。

「ちょっと染みるかと思うけど我慢してね」

「大丈夫ですから、ぱぱっとやっちゃって下さい」

痛い事はさっさとしちゃった方が良いものだから、私はそう答えた。

「じゃ、失礼して」

にこりと笑って、シエンは濡れた布で血の汚れとかを拭き取っていく。
傷口に触れた時、少し痛かったが問題なく我慢の出来るレベルだった。
優しく、手早くしようというシエンの心遣いが見えた。

「はい、出来た。それじゃ、治癒しちゃうわね」
「お願いします」

「治癒（キューア）」
シエンが私の傷口に手を翳して呪文を唱えると、ぽーっとした光が生まれる。

まるで蛍の光の色に似ている。
柔らかい輝きが、身体に染み込む様な温かさを私に与えてくれる。
緊張の糸が解されていくのが解った。

「はい、傷の方はこれで良し！次は他の所ね。手を見せて」
私はシエンの言葉に従って、両手を差し出す。
良く見ると血は出ていないが、皮が擦り剥けている。

「ここも治しちゃいましょ。治癒（キューア）」
シエンはそう言うと呪文を唱え、私の掌を元通りの綺麗な状態へと変えてゆく。

「後は……ここね」
じっと見詰めるシエンの視線の先は、首筋。

「えと、そんなに酷いんですか？」
「間違いなく、それを見た陛下は暴れるとは思うし、父上も賛同し

て何かをしでかすと思う位、良いとは言えない」

「わぁ、ステキ☆宰相様も参戦しちゃうんだ～」

シエンが茶化して言う。

ステキと言っているが実際、目は笑っていない。

父様や兄様が見たら、号泣して大騒ぎにはなりそうな感じかもしれない。

それはそれで、色々と問題がある。

「触れるけど良いかしら？」

シエンが私に伺う。

もしかしたら、シエンは私に拒絶されるのかもと思っているみたいだ。

「はい、お願いします」

きっぱりと言ってお願いすると、シエンはきょとんとした顔をしてからニコリと笑った。

「ナツキちゃんは、度胸あるわねぇ～。普通は怖がるんだけどね～」

「シエンさんは、酷いことする人には見えませんし。何より、こんな姿を兄様や父様が見た時が大変ですから」

「じゃ、少し我慢してね」

シエンはそう言うと、そっと私の首筋に触れてくる。

「治癒（キューア）」

ほわん……とした温かさが首筋に宿る。

「はい、おしまいよ」

「有り難う、シエンさん」
「どういたしまして」
ウインクして私に笑いかけるシエンは、派手な服装とは違い人を和ませる感じが強かった。
不思議な人達だなぁ～と、私は素直に思った。

暴走兄様

「ナツキィィィ！！」

叫び声と共に、扉を壊しそうな勢いで入って来たのは兄様（コウ）だ。
その形相に、シエンとカグラは呆気に取られて固まってしまった。

兄様が、我を忘れているわ……。
黙っていれば、カッコイイのに！　と思ったのは言うまでもない。

だだだだっ！
と、物凄い勢いで私の所まで来ると。

「ナツキ！大丈夫だったか？　変なことされてないか？」
そう口走り、問答無用で私をがばーっ！　と抱きしめる。

その力たるや、容赦がない。

「に、兄様！」

ばしばしと腕や背中を叩いて、気付いて貰おうと試みるが「心配だったんだぞ！」などとブツブツと言っていて私の願いを聞いてはくれない。

「にーさまっ！！痛い！」
私はバシバシバシ！
と、思いっ切り連続で叩くが……兄様は、自分の世界に入り込んでいる。

鳩尾にでも一発入れてしまわないとダメか？
と、思った時。

「折角治療したのに、怪我させる気なの？　アンタは！離れなさいっ！！」
シエンが怒気を込めて言い、兄様をべりっと私から引き剥がしに掛かる。

「こっちへおいで」
少しだけ力強く、私を兄様とは反対方向へ引き寄せる腕があった。
その腕はカグラで、私を抱き留める様に、兄様から数歩分離してくれた。
「大丈夫？」
優しく問いかける声に、ほっと息を吐き。

「ありがと」
お礼をすると、ふわっとカグラは微笑んでくれた。

大人びた表情に隠れていたが、カグラはそんな風に笑えるのね。
確かに、王子様っぽいね。
年相応なら、きっと初恋になっていてもおかしくないくらいの、どきりとする微笑み。
きっと、青年になった時は、ものすんごーくモテモテになるわね。
公爵家の人だし、超優良物件間違いなしだ。

ぼんやりと、彼を見つつ思っていたら。

「あああああああああ！！！」
奇声が上がる。声の主は、兄様。

「ナツキ！お兄ちゃんはそいつとの交際は認めないからな！」
シエンに羽交い絞めにされつつも、どきっぱりと宣言をかます兄様に、頭が痛くなる。

あーあーあー。
どこをどうして、そうなるのか？
と思わず突っ込みたくもなるが、暴走している彼（コウ）を止める者は今の所いない。

「ったく、いい加減にしろよな！」
オカマ口調ではなく、ドスの利いた低音ボイスがシエンの口から吐かれる。

そして、羽交い絞めを解くと素早く、兄様の脳天に手刀を一発落とした。
とっても痛そうな、ごすっと言う音がした。

「うっ！！」
兄様は頭を抱えて、その場に座り込んだ。

「そんなんだから、この子があんな事に巻き込まれるんだよ！　過保護なのもいい加減にしろっ！」
「シエン」
吐き捨てるように言うシエンを咎める様に、カグラは名を呼ぶ。

「アタシが、女王陛下に怒られてあげるわよ。このまま帰したら、この子が真実を知る機会を失いかねないわよ」

意を決した眼差しがそこにはあった。
ただの治療師が、そこまで解るものかとも思うけど、カグラに砕けた感じで接している時点でそれなりの影響力を持っているのは確かだろう。
女王様に怒られるだけで済まされるのは、余程信頼されているか、身近でそれを許されている地位など持っているに違いない。

「大丈夫よ。後で、レオンの方もちゃーんと丸め込んでおくから」
ふふふと笑って言うシエンは、いたずらっ子の様に見えた。
この人は父様とも知り合いらしい。

「さて、ナツキちゃん。真実知りたくはない？」
私の前に立ち、強い光を宿した瞳でシエンが見詰めてくる。

「……真実？」
私は、ぽつりと呟く。

隠されていた真実

隠されている事、故意に隠蔽されている事は何となく感じていた。
知ったからどうにか出来るとも思えない。
母様や父様が隠したいと思うには、それなりの訳があったんだろうし、心労だってないとは言い切れない。

けれど、何となく解っていて、自分が取った行動で問題が起こるのは気分の良いものではない。
知っていれば防げる場合だってある。

「……教えて下さい。私、知りたい」
「なっ！ナツキっ！」
私の言葉に、大いに焦ったのは兄様だった。

「こめんなさい、兄様、私ね。皆が何か隠していたの知ってたの」
「ど、うして……」
「だって変だったんもの。母様は魔法界の女帝って言われてるのに、私の周りには魔法と触れる機会が極端に少ないのはどうしてっって」

「そ、それ、は」
「私の前でちょっとした魔法を見せてくれた兄様は、母様に怒られたのだって変だって思った。私に魔法の才が無いなら父様はきっと、無いなりに生きていけば良いって言うだろうし、でも、そう言うワケでも無さそうだったから聞けなかった」

「あらら、よしよし。ナツキちゃんは良い子ね」
シエンは苦笑して、私を慰める様に頭を撫でてくれる。
優しい手付きに、気持ちが和らぐ。

「シエン、立ち話につき合わせる気か？」
顎で示して、カグラは言った。
指し示す先は、ソファーだ。

「そうだね。さ、座って、ナツキちゃん」
「はい」
二人に促されて、私はソファーに腰掛ける。

私の隣がカグラで、向かい側にシエンでその隣は兄様。
兄様は、私の隣を陣取れなかったので不満気味だ。
だけど、シエンに反対して文句を言う事を一切しない。
彼が、父様の近しい人だと解っているからかもしれない。

「さて。どこから話そうかな。んー、まずは、ナツキちゃんは魔法についてどの程度知っているかしら？」
考えなから、シエンが私に問い掛けて来る。

私は包み隠さずに、自分の解る範囲で答える。
「たぶん、ほとんど知らないと思う。魔法適正についてなら、火属性とか水属性とか、そういった事は一応解るけどそれ以外は……」

知っている、見ている魔法は極少ない。
一般的な知識（本とか記事とか）は、多少なりとも宇宙船の端末から見る事が出来るから解るけど。
実際、文字を読める様になってから色々見たのだが、間違いなく魔法書に関してのものはアクセス制限が掛けられていた。
不用意に実践しないように。

「なるほど。じゃぁ、悪いけど『見』させて貰っても良いかしら？」

「シエン、それは……」
シエンの台詞に、カグラが目を見張って表情を変える。
シエンはそんなカグラをチラッと見て、何事もない様に話を続ける。

「ナツキちゃん、アタシの属性はね、透視なの。未来を見通す力、探しものを見付ける事も出来るわ。けれど、通常はそれを自分で制限してるの。だって要らないものまで見たくないでしょ。ナツキちゃんが生まれる前にレオンから『この子の未来を見て欲しい』って言われて見た事があったわ」

「どうだったの？」
「良くは無かったわ、けれど、最悪な事でもなかった。周りの者が注意すればいいだけの事だったからね」

「今、私に話すのは問題があるからなのね？」
「ええ。今まではそれで良かったけど、これからは間違いなく問題が起きるわ。未だにレオン達が、ここに来ないのが決定的ね。こういう嫌な勘は当たるものよねぇ」
溜め息混じりにシエンが言う。

「だから、見させて欲しいの。女王陛下や宰相様やレオン含め、命令されたら結局見ないといけなくなる。意識があるなし関係なくね。きっと、寝ている間にとかだろうけど、アタシとしてはちゃんとお伺い立てておきたいのよ。ダメかしら？」
「うん、見ていいよ」
私は深くゆっくりと頭を下げる。。

どっちにしても『見られる』なら自分の意志できちんと見てもらいたい。

何よりも自分の事だから、受け止めておきたい。
何も知らない子供のままなら、きっと嫌がっただろう。
だけど、自分は、前世でトコトン嫌な目に遭っている。
無駄に振り回されて、折角の人生を、時間を費やしたくない。

母様や父様は、私を愛するが故に選択するのだろう。
全てを隠してずっと生きることなんて出来ない。
遅かれ早かれ、いずれ自分はその事実に辿り着く。

何もかも投げ捨てて、死を選ぶなんてのもしないし、何よりもこの家族は私にとって大事な人達だ。
そんな人達を自分の為に心を砕いて、悩んで、苦しんで欲しくない。
私が聞いてしまえば、負担だって軽くなるだろうし、自分がしてはいけない事をちゃんと知って対処だって出来る。

でも、母様も父様もきっとそんな事、望んでいないだろう。
だから。

――――ごめんなさい、母様、父様。

私は顔を上げて、シエンを見つめた。
私の瞳に現れていた決意が、見て取れたのだろうか、シエンは小さく頷き返してくれた。

「ナツキちゃんの属性はね『破壊（ブレイク）』よ。ちなみに、王子（カグラ）の属性は『重力（グラヴィティ）』で、ナツキちゃんを助ける時に使ってたわね」
「ああ、そうだな」
大した事でもない風に、相槌を打ってカグラは答える。

「……」

ああ、確かに、あのおっさんが地面に押さえ付けられてた。

あれは、カグラの仕業だったんだ。

何となくそんな感じはしていた。

あの時、その場に居たのはカグラだけだったから。

「あの時ね、異変が起きている事に気付いて見通す力を使ったら、ナツキちゃんがいたの。あの馬鹿者の行動で……生存本能だったのだと思うわ。ナツキちゃんの力が発動して、王宮の庭園の結界魔法が壊れたのよ。王宮内は、色々な結界魔法がかけられているわ。かけたのは歴代の王や宰相、この国にある魔法学院の上級魔術師などもいるわ。半分以上、その結界魔法にナツキちゃん達の母親である、ユーナは関わっているわ。だから、今ココへは来れないの。結界修復に手間取っているからね。それと……実際、ユーナの魔法を無効化したり、壊したり出来る者は殆どいないの。それほど、あの人は強いのよ。その魔法を壊したという事は、その事実を誰かが知って悪用しようと考える者が出て来てもおかしくないし……出て来るわね、間違いなく。気をつけなさい」

シエンの辛そうな瞳とぶつかる。

本当はそんな事、言いたい訳じゃないんだろうって分かる。

出来ればそんな未来の一片でもなければ良いって、思ってくれたのだと思う。

こっくり、首を縦に振って私はシエンを見た。

「はい、気をつけます」

「何か相談したい事があったら、何時でも言いなさい。一人で抱え込まなくても良いんだからね？」

「うん」
「ナツキちゃん、貴方次第で未来は変わるわ。だから、諦めちゃダメよ？」
「うん」
優しく父様みたいに、シエンは頭を何度も撫でてくれた。

隠されていた真実（後書き）

やっと出ました、ナツキの魔法属性です。破壊（ブレイク）です。
色々壊せます、危険ですって事で隠していたんですね～。
カグラ君は重力（グラヴィティ）です。
母様＆父様の属性つきまして、まだまだ内緒です。
ちなみに、セリ女王は火焔（フレイム）です。

大人達の会議　another side1

本来ならば、月の光が落ちる庭園は綺麗なものだったが、今現在は異様な空間と化していた。
パチパチと、電気の様なものが庭園内の上やら下やら、空間のあちこちで光って弾けている。

「……どうしてくれようかしら」
怒りを隠そうとせず、セリティア女王陛下はこの事態を招いた者を睥睨した。

拘束用の重力魔法を掛けたカグラは、もう庭園（ここ）には居ない。
しかし、眼下でじたばた地面に這い蹲って固定された愚か者はそのままだ。
この魔法を解く事は容易いが、セリティアはそれをしなかった。
この場で、この者を裁く事も出来るがそれをしたら面倒になる事も解っていたから、イライラする気持ちを抑えて来る者を待った。

「お、お助け下さい、陛下！」
「……喋るな下衆が」
媚を売る様に言われ、ぷちっとセリティアの中で何かが数本キレた。

「私を更に怒らせたいらしいな」
思いの丈を乗せ、ガッ！ハイヒールの踵で、その者の手の甲を思いっ切り踏ん付けてやる。

「ぐあ！！」
悲鳴を上げてジタバタともがく。

「じっとしていなければ、お前の顔が焼ける事になるぞ」
セリティアは、そいつの顔面ぎりぎりの所に炎を出して、置くと多少なりとも溜飲が下がった。

それでも、怒りは収まる訳がない。
「幼い子を手にかけ様として、自分は助かろうなどと思うな！」
バッサリ一刀両断にする様に、セリティアは宣告する。

「それに関しては、同意見です」
スタスタスタと、セリティアの側に寄って来た。

セリティア似の面差しを持つ男性が口にする。
彼の名は、テンリ・ジーノ・ラグナ。
公爵家の現当主で、宰相閣下で、カグラの父親でもあった。
髪は銀茶色、紫の瞳、冷たい表情が似合う美貌で、身長はヒールを履いているセリティアよりも高く、１９０センチはあった。

二人は双子で、身長が同じ位の時まではその気になれば入れ替えも可能なほど似ていた。
今は、女性、男性の身体つきなどで全然違う風に見えるが、顔のパーツを良く見ると似ているのが解る。
性格は、セリティアが炎の様な気性を持ち、テンリは氷の様な気性を持っていて、実際このお蔭で政務のバランスが上手く取れていた。

「テンリ。遅いわよ！」
「すみません、姉上。近衛に対して庭園一帯の封鎖の通達指示と、ユーナ様とレオン様に庭園の状況を見て貰うために色々とやっていたので」

「それで、どうなの？」
「はっきり言って、最低1ヶ月は庭園を封鎖しなければならないかと。俺も見て来ましたが、空間はかなり断絶していたり、結界もまた壊滅状態ですね。一つマシだと思えるのは、被害が庭園だけに留まっている事くらいですかね」

「そこまで酷いのね？」
「ええ」

「本当に、どうしてくれようかしら、この愚か者を……」
冷や汗だか脂汗だか、解らないものを顔から流しながらブルブルと震える罪人を睨みながら、セリティアは呟く。

そんな彼女を意を汲みつつも、テンリはさらりと告げる。
「取り合えず、地下牢へと転送して置きましょう。到着されたお二方が暴走されるとも限りませんし」

「ええ、やっといて」
セリティアの言葉に頷き、テンリはさっと手を振る。
すると、一瞬の内に罪人は消え去る。

その直後、セリティアとテンリの眼前の方から歩いてくる者が二人いた。
「ユーナ姉様、レオン……」

「セリ！」
セリティアを見とめると、ユーナが小走りに二人の所へと行く。
少し遅れて、レオンが続く。

「セリ、ナツキは？」
「カグラが治療室へ運んだわ」
「なら、大丈夫ね？」
「ええ」

「ごめんね、セリにも迷惑を掛けてしまったわ」
「私の方こそ、もっと注意しておけばこんな事態にならなかったのに……。ごめんなさい、お姉様」
セリティアは、ユーナに頭を下げる。

「セリ、女王がそう簡単に頭を下げてはダメよ」
俯いたまま首を横に振り、セリティアは答える。

「ユーナ様、姉上は珍しく自分の失態を謝罪しておりますから、気持ちを汲んで上げて下さい」
苦笑しつつ、テンリはユーナに言うと。
「解りました。その謝罪受け取ります。だから、もう顔を上げて……ね？」

「お姉様……」
力なく顔を上げて、セリティアはユーナを見た。

「大丈夫よ、こんな日が来るかもしれないと予測はしていたから」
「ごめんなさい、お姉様」
セリティアはユーナに抱き付く。
ユーナはセリティアを落ち着かせる様に、その背をぽんぽんと叩く。

それを横目で見つつ、テンリはレオンに向き直る。
「それで、レオン様、庭園一帯の状態はどうでしたか？」

「多少時間が掛かるとは思うが、空間も結界も直せる」

「では、修復に必要な魔術師の要請を頼めますか？」

「お義父さんに頼んでみます」

「魔法学院の理事長にですか、でしたら心強いですね」

「こんな事になった責任は、こっちにもありますから出来るだけ対応させてもらいます」

「それでは、一旦、ここから引き上げましょう。庭園封鎖の用意をさせてありますから」

「ええ、そうしましょう」

レオンは頷いて答えた。

大人達の会議　another side2

庭園を後にした4人は、セリティアの自室にいた。
向かい合わせのソファーに、セリティアとテンリが座り、反対側にユーナとレオンが座っていた。

「セリ、頼みがあるの」
「お姉様？」
真剣な表情で言うユーナをセリティアは見詰める。

「本当はもっと後の事だと思ってたわ。でも、今回の事で決めておかなきゃいけないって思ったの。これ以ばかりは、私の一存でどうこう出来ないから……」
「私が、お姉様のお願いを無下に出来るとお思いですか？」
「思っていないわ。だからこそ、出来る事なら避けたかったの。巻き込んでしまってごめんね」

苦渋満ちた表情を浮かべるユーナの肩にそっとレオンが触れる。
レオンは、小さく頷いてユーナの言いたい言葉を紡いでいく。

「これは、アマハ家の、俺とユーナ、そして義父（ちち）の総意でもある。ラグナリア星皇家の後ろ盾をお願いしたい。ナツキが成人するまでか、自身の力を扱える様になるまで、その御名で守って欲しい」

深く頭を下げるレオンに、驚いた様に目を丸くするセリティア。
そして、その意図が何を示すのか理解し、テンリはふうっと息を吐きだした。

「それは、我が息子に盾になって欲しいという事ですか」

「私の名前では、下手をすればあの子は狙われる。今回の様に……。他にも魔法の無い場所へと行かせる選択肢もあったけれど、あの子の持つ力では、それが解決策にならないの。力が安定し、使いこなせるまでどの位の時間が掛かるかは解らない。最終的に魔法学院へ入れるならば、ラグナリア星皇家の御名は抑止力になるわ。あの子の安全はそれなりに確保出来る」

苦しそうに瞼を伏せて、ユーナが言葉を吐き出していく。

「そうでしょうね。この星に居る殆どの者なら、ラグナリア星皇家に対し愚かな真似はしないでしょうからね。ですが、レオン。いいんですか？こちらとしては、正直、魔法界の女帝の名をラグナリア星皇家に引き入れる事は願ってもない事ですよ？この星に不可欠な結界魔法を施す力を持つ者を本来ならば、それなりの報酬を出してお願いする所を確実に足許見られて値切られますよ？」

にやりと口の端に微笑を乗せて、テンリはレオンとユーナに告げる。

足許を見るけど良いのか？　と言外に言っているのだ。

そもそも、財政やらをも統括する宰相閣下だから自分が指示するんだと、ぺらっと白状している事に他ならない。

横目で、セリティアがテンリをちらっと見るが平然としていた。

「あの子の安全が確保されるのなら、願ってもない事よ！」

顔を上げてユーナが、きっぱりと言い放った。

「良いでしょう。今現在、カグラには決まった婚約者はいません。カグラは冷めてますから、いずれ自分をターゲットにしてくる女性達を避ける為にも間違いなく、この話に一枚噛んでくれるでしょう。姉上がご結婚されてお子を授かるまでは、俺がラグナリア星皇家の第1皇位継承者で、カグラは第2皇位継承者です。宰相を続ける場

合は辞退する事になりますから、カグラが自動的に皇位に一番近い者になり、ラグナリア星皇家を継ぐ者になる。まぁ、その場合、ナツキ様は皇太子妃候補か、王妃候補になりますけどね。それで、良ければ構いませんよ」

「それと、ナツキの力が安定し、二人の内どちらかがその関係を破棄したいと願ったら、私達は速やかにそれを受け入れます。無理強いはしたくないもの……」

ユーナがゆっくりと言った。

大人の打算だらけの事だけど、それでも、本人達の気持ちが大事だとユーナは思った。

「ねぇ、もしも、二人が本当に恋仲になったらどうするの？」

ふと、気がついたようにセリティアが言う。

「それはそれで、構いませんよ。俺はね」

ふふふ……と、企み顔で笑うテンリをじと目見るレオンが、口を開いた。

「ナツキを嫁には行かせないぞ、テンリ！」

「レオン、あんまり娘にベタベタしてるといつかウザイって言われて嫌われるぞ」

娘が可愛いくて仕方のないレオンを知っていて、テンリは面白がってからかう。

「うぐっ……」

テンリは、自分の所業に多少心当たりがあるのか口篭もる。

「ま、家と縁組になって一番嬉しがるのは姉上でしょうけどね」

「そうよね！大っぴらにお姉様って言っても誰にも文句は言われな

くなるわね！なんて素晴らしいの！お姉様、是非ともこのお話が進めましょう！」

セリティアは暴走しかかるが、テンリがさらっと言って宥める。

「こればかりは、二人の気持ち次第ですからね。大人はお膳立てして見守ってましょうか。周りがどうのこうの言うと上手くいくものもダメになりますからね」

にっこりと笑うテンリは、宰相閣下だけあって策士であった。

ナツキ15歳の時・・・・

「え？え？えーーーーー！！」

壁兼巨大スクリーンになっているディスプレイモニターを見て、私は絶叫した。

映し出されるその映像には、母様（ユーナ）とセリティア女王陛下がにっこり微笑んで握手をしていた。

映像の内容は、婚約発表だった。

特別報道番組的な感じのニュースだった。

ええ、転生してもアニメ大好きっ子のままだったので、今日も楽しみに見ていた作品の途中で切り替わった映像に唖然。

ものの数分も経たずに、絶叫しました。

何ですかコレ？！

母様、嫌がらせなの？　って、本気で思いたくなるニュースに頭を抱えてしまいました。

だって！　だって！！

女王陛下（セリティア）の甥で、カグラ・ジーノ・ラグナ、公爵家嫡男と私のものだった。

カグラって、あの時の彼でしょう？

王子って言われるのを嫌がる少年だった、彼。

さぞかし、今頃は美しく育っている事であろう。

そんな彼と私が婚約？　ってなんでやねん！

あの事件以来、１０年近く経っていて、一度も会っていないのに！

そんな婚約話も一度だって話題に上った事ないのに！

なぜに、婚約ですか！？

しかも、私に断りなく！

「うそでしょおおおおおおお！！！」

私は、力の限り叫んだ。

――――――――ジュラーレ魔法学院入学前日の出来事であった。

「時は無情よね……」

私は、ラグナリア星のジュラーレ学院都市駅に立っていた。

地下から、地上へ出て、空を見上げると、紺碧の色が広がっている。

本来なら清々しい門出だというのに、気分は海溝に沈んだ感じだ。

昨日の出来事が尾を引いている。

唖然とした婚約発表の件は、実はそれだけに留まらなかった。

問い詰める私に。

「ナツキの為よ。それと、彼（カグラ）も今年ジュラーレに入るからもし、出会って恋に落ちても大丈夫よ」

母様は爆弾を落としていった。

とは言え、名前と性別を女性のままで入学したら、色々と面倒な事になりかねないかもしれないとの事で、魔術で性別を中性体（未分化）にして、名前を父親の姓で名乗る事にした。

中性体（未分化）の身体とは、男でも女でもない微妙な状態の事

で、強い魔力を持って生まれた者に良く表れる現象で、不安定な魔力が肉体に影響を及ぼす事で知られている。
女性として入学したら同じ名前で勘繰られる事も、中性体と言う身体で少なくなり、ナツキ・ルウィン・アマハは名前を詐称（？）して入る事となった。

今の私は、ナツキ・タカマガハラという名前で、女性でも男性でもない変な存在になっている。

ジュラーレ魔法学院（前書き）

学院についての説明的な感じです。

ジュラーレ魔法学院

ジュラーレ魔法学院のある場所は、所謂学園都市というものである。
しかも、超広大だ。

このラグナリア星を支える要の魔法使いや魔術師を輩出するのだから、しょぼい訳が無かった。
学院は、二種類の学科で構成されている。

一つ目は、魔法学科。主に魔法や魔術を学ぶ。
２つ目は、宇宙工学科。宇宙船の構造から、宇宙船のパイロットになる為の各種を学ぶ。
入学して最初の１年は魔法の基礎＋宇宙と宇宙船についてを学ぶ。

２年目からは魔法の適正が低い者は、宇宙工学科へと編入していく者も多い。
稀に宇宙工学科から、魔法の適正が高い者が魔法学科に切り替えて学ぶものもいる。
学生にとっては、自分に合った学科へ移動出来るので、実は結構喜ばれている。

入学は基本、１３歳から入れて、卒業は特に決まっていない。
魔法学科を全て学んだ後、宇宙工学科も全て学ぶ者もいるくらいだ。
飛び級して卒業する者もいる。

それぞれ一つの棟？　と言うか塔みたいな城みたいな感じの建物があちらこちらにある。

その中央には、寮が存在している。
どの棟に行くにしても距離が平均的になるようにの配慮らしい。

寮はまるでローマの円形闘技場か、絵画のバベルの塔みたいな感じの円形の建物で、真中がくり抜かれて中庭になっていた。
中庭には中央棟と呼ばれる塔が建っている。その棟には、各寮生が共用で使う施設がある。
食堂、浴場、図書室、レクリエーション室などがある。
また、各階毎に、各寮からの通路が通されている。

また、この都市には医療棟（病院）などもあり、実際は最先端の技術がこの都市に集まっていると言っても良いほどだった。

学院と街との境は、大地に横たわる森と湖と草原だった。
その向こう側に街が存在していた。

向こう側の街に買い物に行くには、些か面倒な手続きをしてから学院を出なくてはいけない規則になっている。
一応、ネットワーク環境は完備されているので通販を使って必要な物を購入する学生も多数いる。
普通に実物を手にとって買い物をする者には、多少不便な学院生活だったりする。
まぁ、慣れるまでが大変なだけかもしれないけど。

まず新入生は、前日までに入寮しなくてはいけない。
寮の決まり事などを知らなくてはいけないからだ。

大きな建物で下手をすれば迷子になる事必至な、ぱっと見は文化遺産な感じの寮だ。
ハッキリ言って、何を考えて作ったのかが皆目見当がつかない馬

鹿デカイ建物。

イギリスのお城みたいな学校とか、寮とか憧れたけども、いざ自分がその状況になると腰が引ける。

スケール違い過ぎで、前世が小市民気質な自分に叱咤して突撃命令を下す。

寮の入り口は四か所。

東の出入り口が、セイリュウ。

南の出入り口が、スザク。

西の出入り口が、ビャッコ。

北の出入り口が、ゲンブ。

そのまま、四分割された建物の範囲が、寮内の名前を冠する様になっている。

例を出すと、寮の北側の部屋に入る者は、ゲンブ寮の何号室という風になる。

ちなみに、中庭はキリンの庭と呼ばれている。

入口はどこから入っても良いらしく、入寮手続きにはここから入りなさいとは記載されていなかった。

私が居るのは、東側のセイリュウの入り口。

凝った蒼い龍の意匠が施された木の扉が、左右に開かれている。

入口には、Ａ５サイズくらいの超薄型ディスプレイ端末を持った人を含め、男女５人が立っていた。

私は、彼らの前まで行き、ぺこりとお辞儀をする。

「初めまして、ナツキ・タカマガハラです」

「ジュラーレ学院へようこそ」

顔を上げると、にっこり笑顔で私を迎えてくれる。

ここがこれから私が住まう、場所なんだって思うと少しだけ鼓動が速くなった。

どんな風な部屋なのか？

どんな内装なのか？

どんな人達が居るのか？

馴染めるのかどうかも、不安だった。

でも、ここには、お祖父様もいるから時間が有る時に会いに行こう。

今まであまり会えなかった分、沢山話せたらいいなぁ。

期待と不安を胸に、私は踏み出した。

ジュラーレ魔法学院（後書き）

入寮の一幕でした。
早く本編キャラ出したいのに、説明があるのでもう少しかかるかな？

キャラ設定（前書き）

ネタバレ含みます。お気を付け下さい。
とりあえずは、こんなヤツラが出ますよ～的な設定です。（笑）

キャラ設定

ナツキ・タカマガハラ（ナツキ・ルウィン・アマハ）この物語の主人公。
魔法界の女帝の娘。
混乱を避ける為に、苗字と性別を変えてジュラーレ学院に入学。
魔法属性は、破壊（ブレイク）
前世は不憫な娘の愛花。
ふわふわの金髪・瞳はエメラルド・肌は陶磁器のような白・身体つきは華奢。

カグラ・ジーノ・ラグナ　ラグナ公爵家嫡男。
学園の入学直前に、アマハ家の娘ナツキと婚約する。
ラグナリア星皇家の第2皇位継承者。
魔法属性は、重力（グラビティ）
銀茶色の髪、紫の瞳を持つ。
母により7歳から騎士団に入れられて、１５歳になりジュラーレ魔法学院に入る直前まで騎士団在籍。

リョウ・セイレイイン　カンサイ地区の富豪の息子。
魔法属性は、雷。
長めの黒髪を右肩で緋色の紐で括っている。瞳はアイスブルー、肌は象牙色。
訛りのあるカンサイ弁を喋る。

レーツェル・エスパーダ　騎士を多く輩出しているの子爵の家系の息子。
カグラとは従兄弟同士（ニーナの兄の息子）である。エスパーダ家は、カグラの母ニーナの実家。

魔法属性は、付加（アディス）。剣などに付加価値をつける。
銀髪、銀蒼色の瞳。
カグラと同期に（7歳）騎士団に入る。15歳になりジュラーレ魔法学院に入る直前まで騎士団在籍。
カグラの専属騎士でもある。

セアリーナ・リース　白の魔法使い。
ラウリウスと婚約中。リース国の第四王女。
出身：リュイア星

ラウリウス・リュート・ディナ　火の魔法使い。
シアーナと婚約中。ディナ国第一王子。
出身：リュイア星

ザーカト星出身メンバー
シノブ・イグニス・ヒエラクス　焔の魔法使い
カイ・ルス・リュンヌ　水の魔法使い
ショウ・アフト・クラトル　光の魔法使い
レイ・ヴァンオー　風の魔法使い
ティア・ルス・リュンヌ　水の魔法使い
ザーカトは、女性の人数が総人口の1割で、一妻多夫制で男性同士の婚姻を認める珍しい惑星。
惑星の性質上、女性が産まれ難く、ＤＮＡも弄る事が出来ない特殊な環境。

ラティーナ・ルー　癒しの魔法使い
ダーク・レイズ　闇の魔法使い

ユーナ・アマハ　ナツキの母で魔法界の女帝で、ジュラーレ学院長。
基本元素属性（地・水・火・風・空）を扱える。

レオン・ルシェルシュ・アマハ　婿養子で、宇宙考古学者。
娘を溺愛していて、息子と良く取り合いをする。
魔法属性：探索（サーチ）

コウ・ルウィン・アマハ　ユーナの息子で、ナツキの兄。現在、家出中。
ナツキと１０歳違い。
妹ラブ！の暴走あほの子になってるシスコンの美形お兄様。
魔法属性：合成：練金（アルケミー）

ルウィン・アマハ　ユーナの父親で、ジュラーレ学院・現理事長。
現在、用務員兼庭師として学園にこっそりいる。
魔法属性：守護（ガード）

ラピス
瞳と長い髪は瑠璃色の中性的な美人
宇宙船リュシオル（スターシップ）のメイン知能でもあり、宇宙船そのものでアンドロイド。

星皇（惑星君主）現在女王
セリティア・ラグナリア　星皇家
髪は銀茶色、紫の瞳、肌は真珠のような白。
魔法属性：火焔（フレイム）

ラグナ公爵家
テンリ・ジーノ・ラグナ公爵家現当主で宰相閣下
ラグナリア星皇家の第1皇位継承者。
　髪は銀茶色、紫の瞳、

ニーナ・ジーノ・ラグナ　カグラの母
副騎士団長

シエン・シア・メーディカ　王宮治療師（医学）
髪はピンク、瞳は水色、身長は高い。
極彩色の膝丈までの長い服を着て、革のサンダルを好んで履いている。
魔法属性：透視（クレア）

キャラ設定（後書き）

突然変更等が入る可能性があります。ご了承ください。

ザーカトは、夕焼けです。

錬金術と魔法と究極な取引

世界は何時も閉じられた、閉鎖空間。
沢山の管を身体に付けて、ベッドに横たわったまま。

何の為に生きているのだろう？
何でこんなに苦しんで生きているのだろう？
何よりも自分を思ってくれている人達に負担を掛けているのだろう。
厄介者の自分を慈しんでくれる家族にすまないと毎日思う。

ただ、自分に出来る事は酷く少ない。
毎日笑顔を見せる事も出来ず。
か細い呼吸をして、命を繋ぐだけ。

この厭わしい身体を捨てて、バイオロイド化出来ればいいのにと思う。
バイオロイドは人間の脳とその人間の使える一部の細胞や臓器などを生体と機械を融合させて、半アンドロイド化させるようなものである。

成人のバイオロイドを作るだけで、小さな国の国家予算並みの莫大な金が必要になるのも事実だが。
とは言え、今の自分では、生きている部分が脳と皮膚だけになってしまうが、この１９年間ベッドだけの閉鎖空間に比べたらそんな事些細なことだ。

動けずただひたすら苦しいのを我慢する毎日と、動けて物を触っ

たり出来る日々は途方もない幸福だ。
家族達もまたそれを望んでいるが、この死にかけた身体を維持するだけが精一杯だ。
そう、それだけの貯えが家には無いのだ。
疲弊し掛けた家族達に苦労はもう掛けたくない。
死を待つだけの毎日ならば、いっそ殺してくれと思う。

そんな日々の中、家族と病院関係者以外の来訪者が訪れた。

「初めまして。ソード＝ケー・ミィーヤァ」
にっこりと笑う青年に驚き、正直戸惑った。

この部屋以外の外を真の意味で知らないので、美醜の基準は良く分からないが、恐ろしく整った顔立ちの青年だった。
ベッドの脇に置かれた椅子に座って彼は切り出して来た。

「俺の名は、コウ・ルウィン・アマハ。単刀直入に言うが、君に取り引きを持ち掛けに来た」
「取り引き？」
「ああ。君にとっては悪い話じゃ無いと思うが、君の両親は君の気持ちを尊重すると言う事だったので直接話に来た」

「どんな内容ですか？」
「君は、バイオロイド化を望んでいると言う話だが、それに間違いはないかな？」

「ええ、望んではいますが……夢物語でしかないですけどね」
僕が自嘲気味に笑うと、彼はじっと僕を見詰めていた。

そして、一拍置いて、彼は口を開いた。

「夢物語でないとしたら、君はその話を聞きたい？」

「えっ？」

「但し、それ相応の条件があるがどうする？」

「そんな話有る訳がっ！」

「そうだね。そんな話、普通は無いね」

「実験台って事ですか？」

咄嗟に思い浮かんだのは、テスト的な被験者を探しているとかだった。

「いいや、違う。ある人物の護衛と言うか、監視とでも言うのかな……その人に危険が及ばない様に気を付けて貰いたい」

「でも、僕の体は見ての通りの状態ですよ？」

「護衛に就いて貰う期間は数年間、大体5年ほどになると思う。その間は動物の形をした身体のバイオロイドに入って貰う」

「ええっ！？　人型じゃないって、人型のバイオロイドを作るのだって相当なお金がいるのに、それ以外も用意するって事ですか？！」

「ああ、君が望むバイオロイドの身体が出来上がるまでは違う身体に入って貰い、且つ対象を護衛監視して貰うのが条件だ。これを遂行してくれるのならば、君が望む年齢から普通に年をある程度経て相当する年齢の外見のバイオロイドをその都度用意しても構わない」

「なっ……それは、大国の国家予算並みになるんじゃ……」

ぎょっとしている僕に、コウは平然と答える。

「そうだね、その位はいくだろうね。でも、それよりも守らなけれ

ばならないんだ。なんとしてでもね。だから、必ず護衛をしてくれる者が必要なんだ。君はそれに適う存在だと思うから……」
　強い意志を宿した瞳の彼に一切の偽りが無い様に思えた。

「貴方は一体どういう人なんですか？　国家予算並みの大金を動かせるなんて常軌を逸していると思えますが……」
「まぁ、普通にバイオロイドを発注したら国家予算はいくだろうけど、バイオロイドやアンドロイドを作成しているグループ企業があるからその辺は安心していい。ちなみに、俺の祖父は宇宙に１つしかない魔法学院の理事をしているよ。名前、聞いた事はないかな？」

　にっこりと笑って言うコウに、僕は更に彼を凝視してしまった。
「ジュラーレ学院ですか？魔法適性が無い者は入れないと有名な？」
「ん～、実際は魔法適性なくても宇宙工学科には入れるんだけどね。巷では魔法適性の方で知られているのか……」

「ええ、魔法は限られた者しか使えない秘法とも言われてますし、魔法使いの乗った宇宙船は加護あるって言われてます」
「とは言え、魔法は万能じゃないよ。守りたい者を確実に守れる訳じゃない。だからこそ、君の助けが必要なんだ。この依頼受けてくれるかな？もし受けてくれるなら、君の望みを叶えるよ」

「その言い方ですと、危険はあるかもしれないって事ですか？」
　含みを持った言葉に、そんな気がして問い掛けた。

「多少はね、あると思う。だけど、それを回避する術を仮の身体に組み込むし、あくまで君は護衛対象を監視し、もしも危険が及んだ時には知らせてくれるだけでいい」

「……」

黙り込む僕に、コウは小さく苦笑する。

「1ヶ月後に答えを聞かせて欲しい」

そう言って彼は去って行った。

僕にとって、18年という歳月は長かったのか、はたまた短かったのかは分らない。

分るのは、狭い世界で生きて来たと言う事実だけだった。

そして、苦しんでいた日々と別れると言う事は、僕の為に苦労をしてきた家族を解放出来る事。

この先、生身の身体が惜しかったと思える日が来るのかは分らないが、先が無い未来を選ぶつもりは無い。

そうして――――僕は、未来を選んだ。

錬金術と魔法と究極な取引（後書き）

新キャラ登場です！（笑）
言わずと知れた、ナツキの護衛となります。
どんな姿なのかはお楽しみって事で、次回に続きます。

お部屋はスィートルーム☆

支給された身分証明ＩＤ兼部屋の鍵を左手握り、右手には厚さ３ミリの携帯ディスプレイ端末を持ってのんびりと階段を昇る。

キーは半透明なオーロラの様に光る金属で出来ていて、キラキラ光って綺麗だった。

１０センチの長さで、先端に穴の様なものがあり、そこに鎖とか紐を通してネックレスやストラップの様にして大半の生徒は持っていると寮長は説明してくれた。

でもってこの携帯ディスプレイ端末は、ス○ホよりも薄くとても軽い高性能ＰＣのようなものであった。

厚さ３ミリで、幅１０センチほどで高さ１５センチほどなのにとっても軽い。

前世で持っていた携帯電話より、３分の１の重さ程しかないと思う。

音声識別認識も出来、私が「部屋へ案内して欲しい」と言えば音声で案内してくれる。

音声は好みでオンオフ可能だし、これ一つで星間チャンネル（宇宙間電話みたいなもの）も掛けられたり、ノートの代わりも辞書機能やらの何でも機能付きで至れり尽くせりの一品です。

これは生徒に必ず支給される物だそうで、失くしたら実費で購入しなくてはいけない。寮長からは「これは高い物だから失くさない様に気を付けて」と注意された。

また、寮の規則、学院の校則などなどもこれに入っているので、

読んでおく様にとも告げられた。
どっさり冊子で渡されたら、面倒臭いなぁって思っていたのでラッキーだ。

「しかし、一体誰の趣味なのかなぁ？」
私は、ロココ調な階段や廊下を歩きながら呟きながら、端末に向かって問い掛けてみる。

「ねぇ、この寮はどんな意図で、デザインされているの？」

『お答えします。この寮は遠い銀河にある惑星にある各地の建物内部をモチーフにして作られており、４つの寮の内部はそれぞれ違う内装となっております。デザイナーが長い学院生活を少しでも楽しめるようにとの配慮と遊び心で作ったそうです。』

「……もしかして、地球？」
『はい。その通りです。その惑星に降り立った者がここへ戻って来て陣頭指揮をとって作りました』

「えっと、そんな簡単に行ける星なの？」
『いいえ、行けません。かの星は、内乱などが多く、我々の技術レベルにも達しておらず、コンタクトをとる事は禁止されてます。ただし、毎年数名限定で調査のために行く事は許可されてます。その星の人間として擬態する事が義務付けられてます』
「戦争無くならないんだ……」

『はい、戦争をしない地域もあるのでそういった場所に調査隊を派遣します。そして、その文化に触れて触発された学院の卒業生がこの寮をデザインしたのです』
端末が答えた後、ピピピピと電子音が鳴る。

『お部屋に到着しました。ＩＤ（キー）をお出し下さい』

キーを出すと、プレートの底の部分が淡くぴかぴかと青白く光っている。

目の前にある木製にも見える扉に施された植物の模様にはめ込まれた、青い石の様なものが同じように光っている。

『キーを光っている部分へ当てて下さい』

言われた通りにキーを石の部分に近付けると、カチンと軽い音がした。

『施錠が解除されました。寮生の認識を登録しますので、手を先ほど光っていた部分に軽く押し当てて下さい』

「……えっと、手のどの部分でも構わないの？」

『はい、指先でもどこでも大丈夫です』

私は端末とキーを左手で一緒に持って、右手の平でぺたっと触れてみる。

木の様に見えていた扉は、不思議な材質な感じだった。

実際には木ではあり得ない感触、金属の様なものだった。

『ナツキ・タカマガハラを認識しました。お入り下さい』

扉が音声を出し、シュインと機械音がして扉が右から左へ開く。

部屋に足を踏み入れると、そこに広がるのは……。

白を基調とした壁には、細工された模様が施されてセンスの良さが伺える。

が。
入って直ぐの室内（リビング）は、どっかのお城の如くなアンティーク風机や椅子。
そして、ソファーとテーブルどこもこれも、くるんとした脚線美を持ったデザインの家具だった。
寝室は、ロイヤルスイート感漂う豪奢な天蓋ベッド。
「どこのホテルよ？ここは！？」
浴室も豪華かと思ったら、意外や意外簡素なシャワー室だった。
まぁ、共同浴場は、中央棟にあるのでそこはきっと恐ろしいほど豪華なんだろうと思う。
口からお湯を吐くライオンなんぞがいそうだ。

黒い箱から出るのは？　悪夢ｏｒ希望？

一通り、室内を見回った後、気付く。
ソファーとセットのテーブルの上に、ちょこんと載っている箱に。

「……？」
近付いてみる。

「コンピュータ、これはなに？」
室内に問い掛ける。

すると。
ピピと電子音と共に回答が返って来る。
『はい。これは我らがマスターよりのナツキ様宛のお荷物です』

「我ら？　マスター？」

『我らと言うのは、寮を統括する管理脳（コンピュータ）や、この学院全てを管理する統合管理脳（コンピュータ）を御造りになった創造主とも言うべき御方（マスター）コウ様です』

「あ～。兄（コウ）様ね」
『はい。そうです。また、私（わたくし）の事はエデンとお呼び下さい。学院の統合管理脳はヘブンとお呼び下さい。緊急事態の際は、直接、我らに繋がります。通常の際は、コンピュータと問い掛けて構いませんし、トラブルで何所かに閉じ込められたとしてもその名で呼び掛けられたら我らは必ず応じますので』

うわー、兄様過保護過ぎ。
そうは言っても、前科があるからそこまでしてもきっと、し足りないんだろうけどね。
これは保険その一ってトコロだろう。

だとしたら、箱の中には保険その二がある可能性が高い。

「……」
箱を凝視する。
大きさは大体だけど、高さと幅４０センチくらいの抱えて持ち運べる位の箱。

黒い金属の様な切れ目の無い箱の中央に、銀色の5センチ四方のプレートが嵌っている。
このプレートは、識別プレート呼ばれる物で対象者を認識する小型コンピュータである。

人差指で、銀色の部分をタッチする。
すると、プレートを起点とし上下に光が走る。
光が走った部分が、パカっと左右に箱が勝手に割れる。

「えっと……」

中にはちょこんと座ったニャンコみたいな黒い物体が、目を瞑った状態で招き猫の様に鎮座している。
口元には、クリアカラーのアクリル板の様な物を何かを咥えている。

兄様からのメッセージカードなのは分った。
それに、ちょんちょんと指先で軽く叩く。

透明なカードが、銀色に光る。

『起動を開始します』

と、金色の文字がプレートに浮かぶ。

「……」

すぅっと、ニャンコの目が開く。

ぱちぱち瞬きを数回するその姿は、可愛い。

首を動かし、私にプレートを受け取れと言う仕草を示す。

手を出すと、咥えていたそれをポトリと落とす。

手の中でプレートが強く輝き、プレート状に小さな３Ｄホログラムが出現した。

その姿は、間違いなく私の兄様。

「ナツキ、入学おめでとう。兄様からのプレゼントを同梱しておいた。受け取ってくれるよね？　もし、困った事があれば彼に言うと良い。彼には、俺の緊急回線（ホットライン）を教えてある」

彼？

彼って事は、このニャンコちゃんは男の子と言う事なんだろう。

「詳しい事は彼に聞くと良い。また、学院、寮生活は大変だと思うが、まずは困ったら学院内にいるお爺様に相談する事を忘れないようにね。あと！　兄様は、皇太子候補との婚約は反対だから本当に嫌だったら言うんだよ！？　その時は、何所へだって逃げてあげるからね！　だから――――」

ぺちん。
右手でプレートを封じて起動を強制的に止める。
放っておけばどこまでも、延々と言いたい放題言うのが分っていたので思わず停止。
「兄様……」
心配なのは分るが、第三者（？）が居るのを分っていてシスコン振りを披露するのは勘弁して欲しい。
「初めまして。ナツキ様」
にゃんこが、じっとこちらを見詰めて口を開いた。
口から出たのは、予想通り「にゃぁー」ではなく、人の言葉。
キターーーーーー！！！
兄様の保険、その二だっ！！！

黒猫ではありません。黒豹です。

「初めまして。私の事は知っているのね？」

そう問い掛けると、丸い黒曜石な目が私を見上げる。
長い尻尾をフリフリする、愛らしい姿に思わず撫で撫でしたくなるのを堪えつつ回答を私は待った。

「うん、知ってる」
やっぱり、口から出るのは「にゃー」ではなく、キャラメルチックなヴォイスの少年の様な高い声。

「んと、訊いても良いかな？」
「ど～ぞ～」
「私の名前をどっちも知っているの？」
「うん、知ってる。コウが知ってる事は殆ど教えてもらっているよ」
「そう、なら自己紹介は省いても良いわね？」
「イイヨ～」

「じゃあ、次の質問ね。貴方の名前を教えて」
「ボクは、ソード＝ケー・ミィーヤァ。ソードって呼んで」
「ソードね。分ったわ、私の事はナツキって呼んで構わないわ。それで、貴方は何故その身体にいるの？」
「取り引きだからね。まぁ、面白い体験だから楽しんで黒豹ライフをしようと思うんだけど何か問題ある？」

ん？　クロヒョウ？　黒猫ではなくて？
良く見ると、黒い毛並みに斑模様があるような？

要するに子供の黒豹の身体と言う事か。

「え？　黒豹なの？」

まじまじと見る私に。

「うん。そうだよー。子供の黒豹だから、ぱっと見ただけじゃ猫と変わんないし疑われないでしょ」

「うーん……でも、大丈夫なの？　寮内に動物が居るのって規則違反にならない？」

「あ～、その辺に抜かりはないよ～。何てったって、理事長が1か月前から飼っているって事になってるから」

「……それは、確かに誰も逆らえないかも」

「何所に入ろうが、フリーパスだよ。まぁ、調理場とかは衛生上駄目かもしんないけどね。基本的には、問題なし」

「でも、疑われない？　理事長と私の関係とか？」

「まぁ、四六時中ナツキに張り付いていたりしたら怪しまれるから、適当にあっちこっちに行って愛想も振り撒くし、一応ネコ科の気まぐれで好きなようにさせておく事が通達されているから大丈夫だと思うよ～」

ソードはそうのんびりと答えて、かりかりと右前足で頭の天辺を掻く。

やだっ、そういう仕草すると普通のニャンコに見える！

さ、触りたい！　出来る事なら、抱きしめたい。

だめかな？

「ねぇ、さ、触っても良い？」

私がそう言うと、きょとんとした瞳を向けてくる。

首を少し斜めに傾げた仕草も可愛い。

不自由が無い生活が長いけど、動物と触れ合うとかは一切無かったので猫とか触れたくてウズウズしてしまう。
やっぱり、前世での動物好きの本能が湧いてしまいそうだ。

「……もしかして触りたいの？」
「……うん」
「あ～、そうくるよね～」
素直に言った私に、困った様に右前足でもう一度顔をカキカキしながらソードは言う。

「ん、まぁ、いいよ」
「わぁっ。ありがとう」
手を伸ばし、黒い毛並みをそっと撫でる。

うわー。柔らかい！
温かいし、普通の動物と変わらない感触。
この身体の中身半分は機械なんて思えない。

ん？　んんん？
あ、私完璧に話を脱線させちゃった？
あーん、でも、このもふもふ感！　堪らないっ！

撫で。
撫で撫で撫で。

はっ！！
いかんいかん！
トリップしてる場合ではないんだった！

「え～っと……訊きたいんだけど良いかな？」
後ろ髪引かれつつ、私は手をソードのおでこから離して問い掛けた。
「なーに？」
「兄様との取り引きってなに？」
「簡単に言えば、身体かな」
カラダ！？
一瞬ＢＬネタが過った自分に突っ込みを入れつつ。
「身体ってバイオロイド？」
「そう。以前の身体はポンコツでね、ずーっと寝たきりだったんだ。そこにコウが現れた」
「……酷いっ」
反射的にそう思った。
どうにも出来ない状況に交渉を持ち掛けるなんて、脅迫と変わらないじゃない。
「酷くなんかないよ。ボクにとってはチャンスだったからね。君を卒業まで見守れば、望む身体が手に入る。本来なら一生掛っても手に入れる事が出来ない身体を」
「……だからって、兄様ってば何を考えているの。こんな危険なまねをさせるなんて！」
「あ～、危険なのは知ってるよ。ナツキのご両親にも頼まれたしね」
「え？」
「危険なのは承知の上だよ？　それに、その危険性も考慮に入れて布石も立ててある。まぁ、価値観の違いだから解らないかもしれないけど。ボクはこの生活を楽しんでるんだよ」

「でも……」
「ボクにとってちょっとスリリングでも死しか見えない箱の中で生きるより、今は自由で幸せなんだよ。だから否定しないでよ」

黒曜石の瞳がじっと見つめる。
彼なりの人生から学んだ、それが答えなんだろう。
形は違うが否定される経験を知っているから解る。
それぞれが望む幸福。
無茶をしてでも掴み取りたい未来があれば、選ぶしかない。
彼の決意を、選択を、否定しては駄目。
もう後戻り出来ない状況に彼はいるのだから。

「うん、解った。卒業するまで、私と仲良くして下さい。出来れば友達になってくれると嬉しいな」
「へ？」
「ダメかな？　笑われるかもしれないけど、私ずっと宇宙船暮らしとかだったから友達いないの。だから、初めての友達になって下さい」
右手を出して、正直な気持ちを口に出してお願いする。

「……ありがとう」
ソードはそう答えると、前足の肉球の部分で私の右手テシテシして応じてくれる。

その姿があまりにも可愛くて、抱き上げてぎゅっとする。
「うん！　よろしくね！」
「ヨロシク」

ソードの表情は解らないけど照れたのかもしれず、抱き上げた私の肩を肉球でぽすぽすしていた。

仕込みはばっちり？

豪華な廊下をてくてくと歩く。
私の足元では、黒猫にみえる黒豹のソードがトテトテトテと付いて回る。

あぅ～～。可愛いな～。
思わず顔が綻ぶ。

「にゃぁぁ」
目が合うと、ソードが鳴く。

何だよって返事をされた気になる。
たぶん、間違ってはいないだろう。
外では猫として振舞うと言っていたので、その通りの反応だけどね。

二人（今は一匹だけど）して、階段を使って一階へ移動する。
建物は１０階建てで、各階への移動手段はエレベーターと階段の２つだけど、この階段は音声認識でエスカレーターとなる。
基本的には稼働していないので、上に乗った後『３階へ』と言えばその階まで移動してくれるという優れもの。
自力で行くのを好む人は、そのまま上がって行けばいいと言う寸法だ。

ちなみに私の部屋は2階にある。
ソードの出入りは、窓からでも楽々な位置の部屋でもある。
まぁ、家族の誰かが手を回してこの部屋に決めたのかもしれない

けど。
職権乱用はどこまでいくのかを考えたら、ちょっと頭が痛くなるわ、ホント。

まず一番に散策する場所は、各寮で区切られた中庭だ。
窓から見えた庭が、凄かった。
イングリッシュガーデンぽい感じの作りだったので、お茶会したら映えそうと思ったのでじっくり覗いてみたいと素直に思った。
事前情報で、それぞれの寮の区切り毎に庭も違うらしいとの事を聞いていたので興味が湧いていた。
あと、お祖父様から「入寮したら中庭を必ず見においで」と言われていたのもあるので、最初は中庭に探索するのを決めていた。

当初の予定と違うのは、黒豹のソードがナイト役を務めてくれることかな。
勝手知ったる我が家っぽい足取りのニャンコ風な彼。
てとてとてと……と歩いていても、寮内にいるすれ違う生徒の殆どは気にしていない様子が見てとれた。
どうやら、箱に入ったのは仕込みみたいなものだったようだ。
兄様からのメッセンジャーとして態々箱に入って、自己紹介したってワケみたい。

中庭へと続くドアは、木製風の扉ではないが不思議な文様で細工されている。
取っ手らしき箇所に手を触れると、シュインと自動にドアがスライドして開いた。
外に出ると、石畳と緑の絨毯で出来た小道と植えられている花々が出迎えてくれた。

「わぁっ……」

私は思わず感嘆の声を上げる。

今の私は、本物の植物に触れる機会は少ない。
だからかな、前世で見た時よりも何故か物凄く感動した。
花や草木の匂い。
さわさわと音を立てる植物たち。

なんか、良いな。こういうの。
晴れた日はのんびりここで、1日ぼーっとしていたい。
和む。
癒されそうだわ。

「うにゃあああん」
前を歩いていたソードが振り返り、私を見て鳴いた。
そして、てててと軽い足取りで先を進む。

「ん？」
私は早足でソードの後を追う。

薔薇のアーチを抜けると白い東屋が建っていて、そこの近くに座り花の植え替えをしている作業着を着た庭師らしい人が一人いた。
ソードはその人に寄って行き。

「にゃー」
と挨拶をする。

「おお、ソードかい。元気か？」
背中しか見えないけど、老齢な男性の声が耳に届く。

「うにゃ！」

元気だ！　と宣言するかの如く答え、私の方へと駆け寄って来る。

「にゃ、にゃー、にゃあー」

何かを告げる様な、鳴き声を上げる。

作業をしていた人が立ち上って、こちらを向いた。

好々爺した老人が。

茶色い髪と翡翠色した瞳を持った、見知った人が穏やかに笑っていた。

おおおおお、お祖父様！！！

なななななななな、なんで！！

こんなトコロで庭いじりなんてしてるのぉーーーー！

好感のもてる女性でいましょう。

危うく叫びそうになった私は、自分の手で唇を抑えた。
そんな私の苦労を知ってか知らずか、お祖父様はにこやか～～に好々爺然と話しかけて来る。

「やぁ、初めまして、お嬢さん。新入生かな？」
「は、はは、はい……」
「この庭は気に入ってくれたかな？」

ホクホク顔で話しかけて来るお祖父様に、私は僅かに顔を引き攣らせつつ答えを選んでいく。

「え、あ、はい。素敵なお庭ですね」
「そうかい？　この中庭は儂が丹精込めて手入れをしているのでな、そう言って貰えると嬉しいねぇ」
「あの……お爺さんが全てお一人で行っているのですか？」
「そうだよ。理事長に一任されていてね、自慢出来る庭にしているんだよ」

心底楽しそうに笑いながら、そうのたまう現理事長（おじいさま）。
自分で自分に任命してるって事？
要は自分の趣味って事ですね、お祖父様……。

……って事は。
知らぬは生徒ばかりなりってコトかな？
知っていたら、理事長が丹精込めて作った庭を荒らすような輩（おばかさん）の為にも一応告知はされている筈だ。
その告知がされていないのは、何か思惑があってって事だろう。

知らないで荒らしたら、即退学とか？
でも何かしらのペナルティーはあるかもしれない。
うわー。あらゆる意味で気をつけないと、大変かも。
どこにトラップ紛いのモノが仕掛けられてるか解ったものではない。
キレて何かに当たるのは、危険かもしれない。
気を付けなきゃ。

「気に入ってくれたなら、ゆっくりして行くと良い」
にっこりと笑う、お祖父様。

「あ、ありがとうございます。凄く和みそうな庭なのでビックリしました。何時来ても良いですか？」
「ああ、どうぞ。お嬢さんに褒められるのは嬉しいものだね。儂にも孫娘がいるのでな、孫に言われてるようでとても嬉しいよ」
「そ、そうですか……それは光栄です。えっと、あの、良ければお仕事見ていても良いでしょうか？」

他人を装いつつ会話するのは、大変なので取り敢えず話題を強引に振ってみる。
お祖父様は一瞬不満気な瞳になるが、何か思い付いたのか笑顔に変わる。

「おお、お嬢さんが良ければ花の種類とかもお教えしますよ。あ、土に触るのは苦手かい？」
「あ、いえ、大丈夫です。殆ど触った事が無いのですが、興味はあります！」
厳密に言えば「前世では沢山あるが」と前置きがつくけれど。

のほほのーんとした雰囲気になりかけたところに。

「ちょっと！　そこの庭師っ！」

金切り声の女の子の声が、雰囲気を切り裂いて現れた。

上等な服に身を包んだ少女は、こちらをじろりと睨みつけている。

「儂に用かな？」

不機嫌感びしばしな彼女の視線を物ともせず、お祖父様は平然と訊き返す。

「この庭に虫がいるわ！　全て駆除しなさい！」

「はぃ？」

私は思わず、声を漏らす。

虫、普通にいるのが当たり前だよね？

何を言ってるんだ、この人は。

「ここは、有機農薬でやっていてな、化学薬品を使わない事が決められているんだよ。出来るだけ自然な状態でと理事長からの通達なので虫がいるのは当たり前ですよ」

にこにこ笑顔で、お祖父様が答える。

「そんなの関係無いわ！　私を誰だと思っているの！？　庭師が逆らえる身分ではないわよ！」

自分が偉い、自分が有利なんだと言う迷惑極まりないジャイアニストは、叫んで宣言する。

もしも～～し、暴言止めてぇー！

アナタ、即退学になっちゃうよ？

生徒の運命をかる～く扱える人を相手にしてますよー。

「ちょっと、それは横暴じゃないかな？　理事長の言葉より、貴方の言葉が重いっておかしくない？」
「何よ！　あなた、私を誰だと思っているの！？　私はこの星の財務大臣補佐の娘よ！　あなたなんかよりも偉いのよ！」
「……」

説明しよう！
この星の大臣は独身（子供がいない人）が、なれるという独特の規定がある。
なので、子供を認知していようがいまいが関係なしに対象外になる。
子供がいる者は、出世をしても補佐止まりと言う訳である。
権力を集中させない為の措置で、且つ国民誰でもが大臣になり自分の国を良くしようと努力が出来るのを目的としている。
だからと言って誰も彼もが大臣職に就けるわけでもないのだけどね。

それでも、一部だが、勘違いした特権階級を重視する者もいるのは事実で、彼女はその部類だと思う。
けれど、ここでは――ジュラーレ学院では、通用しない。
身分は関係無しの実力主義でもあるのだから。
規則を破る者には、かなりキツイ罰則などもあるらしいと兄様から聞いている。
身内とて容赦しないのに、マズイでしょ。それは。

「あの～、勘違いしているのではないですか？　この学院の入学試験の時に、生徒に権力はなく、身分は平等な生徒だと言われましたよね？　真っ向否定は不味いと思いますよ」

のんびり口調で、とりあえずは警告をしてみた。
きつく言うと、逆撫でしそうだしねぇ……。
「あなた、私がさっき言った事解らなかったの!?　私のパパは偉いのよ!」
顔を怒気で染めて私を睨む。
「……」
私は、呆然とするしかない。
大丈夫か?この人。
一体どういう経緯で入れたんだろうか、この学院に。
頭の弱過ぎる子が入れるトコロじゃないんだろうけど、たまに混じるのかな。
心の中でため息を吐く。
「そこの庭師にもう一度言うわ!　この庭の虫を全て駆除して、完璧な庭になさい!」
お祖父様を指差して、傲慢にも命令をする彼女に私は血の気が引いた。
「それは出来ません。それでもそうしたいと言うのでしたら、学院長や理事長を通して申請して下さい。あの方々がそれをお認めになるとは思いませんけれど」
笑顔で応対するお祖父様。
うひいいいい。
え、え、笑顔が怖いーーっ。

目が笑っていないよ～～～～。

「庭師風情が私に口答えしてっ！」
つかつかつかと、こちらに歩いて来る。

あ、ヤバい感じだ。
頭に血が上ってるわ。

「……」
すっと、お祖父様と迫り来る彼女の間に私は移動した。

「何よ、あなた。どきなさいよ！」
顔を真っ赤に染めて睨みつける彼女に。

「考え無しの行動は止めた方が良いです」
最後通告をする。

「平民のくせに、口答えするんじゃないわよ！」
冷静さの欠片もなく、罵倒する彼女に辟易しそうだ。

平民って……貴方の尺度でいくと、私の方が上ってコトじゃない？
一応、時期王太子の婚約者よ、私は。
控えるのはアンタよ！　って、言ったら面白そうだけどなー。
ま、口が裂けても言わないけどね。

いずれにしても、この場でお祖父様に何かしたらもう洒落にならない。
どんなに頭がヨワヨワでも、お祖父様を敵に回すとどこまで波及するか解らないもの。
こんな子の親戚ってだけで、巻き込まれる方は可哀そうだ。

「どきなさいよ！」
「いやです」
「～～～っ」
ぶるぶるぶると震えて、彼女は私に掴みかかろうとする。

ザンッ！

目の前に、ぎらりと光る物が割って入る。

「ひっ！」
真っ赤な顔が一瞬の内に真っ青に変わって、彼女はぺたりと地面に座り込んだ。

「ぇ……！？」
眼前にあるのは、銀色に光る刀身。

切れ味抜群そうな、剣の刃。
その先を目を追っていくと……柄を持っているのは、風に柔らかく靡く銀髪、陽光に煌めく銀蒼色の瞳の少年だった。

好感のもてる女性でいましょう。（後書き）

新キャラ登場！です。

自爆したら何も残らない。

「はい、そこまで！　有難うレーツェル、助かったわ」
パンパン！と手を叩く音と共に割って現れたのは、身長は高く、瞳は綺麗な澄んだ水色で、顔の造形はとても良いが、何故か髪はどピンクで極彩色の派手な服を身に纏った男性だった。

何所かで見た事のある人……と、ぼんやり回想出来ない。
それはもう、ドコと言うよりも。
殺されたけたあの日に出会ったアノヒトだ。
忘れる事が出来る人がいたら知りたい位に、存在感のある彼だった。

シエン・シア・メーディカ（オカマっぽい人）でしょ、この人。
あの日より殆ど老化の兆しが見えない位に、同じ顔だった。
父様と同じ年齢なのに、どんな方法でその顔を保っているのか聞きたくなる。

その言葉を聞き、レーツェルと呼ばれた銀髪の少年は刃を鞘に収めた。
「驚かせてすまない。シエンに止める様にと言われたので強硬手段に出させて貰った」

「はぁ……そうですか。ちなみにその剣は本物？」
「そうだが？　ああ、知らないのは無理もないか。僕は、レーツェル・エスパーダ。皇族に仕える騎士で、帯剣を許されている。使う必要のない時は、別空間に剣を仕舞っている。こんな風に」
私の質問に合点がいって彼はそう言うと、ポンとちょっとだけ空

中に剣を上げるとフッとそれは一瞬でかき消える。

「本来ならば学院への持ち込みは制限されるのだが、あの剣は僕の魔道具（マジックアイテム）なので許可されているから違法ではないよ。一応、緊急事態と言う事で許可はシエンから出ているからね」

にっこりと微笑みを浮かべて、レーツェルは回答する。

「アタシはシエン・シア・メーディカ。治癒魔術の教師で、この寮の寮監よ。申し開きがあるならそっちで聞くわ。パーム・グラニット」

へたり込んでいる彼女の隣に立つと、シエンは強い口調で言い放った。

しかも、目がマジだ。

冷たい表情で、正直おっかない。

そして、流石と言っていいだろう、パームはむっとした表情になり立ち上がると。

「何よ、それ、私が悪いと言うの?!」

横柄な態度で言い放つ。

「ふふふふ……パーム、アンタ違う意味でも凄いわね。ある意味称賛に値するわね。このアタシにまでそういう態度とはね」

地を這うような嗤いと侮蔑する様な賛辞を送るシエンに、マジで私は怖いと思ってしまう。

「そりゃあ、そうだろうよ。自分の世界（ものさし）でしか物事や他者を測れないんだからな。シエンが、治療魔術省の大臣だって知らないのは、愚か者の極みだろ？　ケンカ売っているのが自分の父親よりも地位が高く権力もあるのを知らないとは、本当に滑稽だ。久しぶりに見

てもこの手合いは救い様がないな。一体、コレのドコに、穏便に済ませてやる必要があるんだ？」

呆れかえった透る美声に、はっとなってその方向を見ると……東屋の柱に背を預けて、冷やかに見詰める少年がいた。

「う、そ……」

私の口から思わず声が漏れた。

風に靡く銀茶色の髪から見える幻想的な紫の瞳が射抜く。

整った顔立ちが、皮肉気にこの状況を見て口元に笑みを浮かべている。

少年ぽさを残しつつも、大人びている綺麗な美形顔や、あからさまに醸し出る雰囲気が上流階級の人間だと言外に現わしていた。

現・宰相の息子にして、当代女王陛下の甥っ子、ラグナリア星皇家の第2皇位継承者で、ついこの間私の婚約者になったカグラ・ジーノ・ラグナその人じゃないのよぉぉぉぉ！！

ダッシュで逃げたい。

そう思ってもいいよね？

何故に速攻で遭遇しなくてもいいじゃない。

あああああ、どうしよー。

ナツキ本人だって事が、バレませんように！！

私は心の中で、神様に願った。

無理矢理に首を突っ込むのはハタ迷惑です。

「あ～あ～、王子が来ちゃった」
心底嫌そうにシエンが言った。

「王子はヤメロと言っているだろう」
同じ様にカグラもまた心底嫌そうにシエンに言う。

「カグラ、部屋で待っていてくれと言ったのに何故来たんだ？」
レーツェルは、カグラの許へ近寄った。

前にも聞いたやり取りをする二人を、あっさり無視（スルー）して会話をぶった切る勇者がここにいた。

「グラニットを失脚させるのに好都合なネタを横取りされるのが解っていて、どうして俺が待たなくてはいけないんだ？」
にやりと笑うカグラ。

「根に持ってるわね～、ホント」
「だな」
シエンの言葉に、頷くレーツェル。

「カグラが来ちゃったし、寮監室で尋問する必要が無くなってしまったわね」
シエンは面倒臭そうに、ぼやきながら視線をお祖父様へと移し。

「どうしますか？」
と、問い掛けた。

「では、僭越ながら本館の会議室ではどうでしょう？」
お祖父様の口調は穏やかなのに、何故か冷っとした。

「じゃ、アタシ達は先に行くわね」
視線をパームへと戻し、命令口調でシエンは告げる。

「貴方は本館へ行ってもらいます。拒否権はありません。現時点を持って、パーム・グラニットには違法行為の重要参考人として来て貰います」
シエンの言葉に、パームは目を見開き愕然としていた。

「……なぜ？」
「貴方の入学が不正の可能性があります。先ほどの行動などに於いて、当学院に相応しく無く、よって今回の件も合わせて尋問します。抵抗されるのならしても構いませんが、その時は強制的に隔離転送をします。どうしますか？」
「……っ」
真っ青な顔になって、パームは震えて突っ立っていた。

「さぁ、来なさい」
シエンはパームの右腕を掴み、容赦なく連れて行く。

その姿を私は、呆然と見詰めていた。

「お嬢さん、儂も彼に先ほどの詳細を教えないといけないので失礼します。変な事に巻き込んでしまって申し訳ない。嫌わずにこの庭に通って来てくれると嬉しい」
お祖父様が困った様にお詫びを言う。その姿は何故か捨てられた小動物を思わせる。

私が来ないと確実にいじけるね、これは。
傍目には、ただのそこら（？）の老人と学生の交流だとしても…
…お祖父様にとっては会う機会が少なかった大事な孫娘（今は中性体だが）との交流だ。
そんなのを奪った日には、壮絶にいじけて拗ねまくるだろう。
お祖父様が欲しい言葉はただ一つ。

「はい、勿論です。喜んでお庭の方を散策させて貰いますね」
笑顔で返事を返すと、お祖父様は嬉しそうに笑って。

「有難う。ゆっくりして行って下さいね」
ぺこりと軽く会釈をして、シエンが消えて行った方へと進んでいく。

凄まじい茶番劇だが、誰かが見ているとも限らないのでフリは必要だ。
この目の前にいる二人にも言えることだけどね。
バレてるのかいないのか、見当がつかない。
シエンは論外だろう。彼は『見える』人なのだから隠しても意味はない。
私に一切触れなかったのは、その様にするのだと言うポーズでもあるのが理解出来た。

さてこの窮地をどう切り抜けようかな……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7531s/

Our place

2011年11月27日02時06分発行